

---

# 異世界プログラマ

結城由良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界プログラマ

### 【Nコード】

N0246U

### 【作者名】

結城由良

### 【あらすじ】

6 / 18 あらすじ更新

「俺の名前は吉田卓郎よしただたくみちろう、天才とまでは言わないが優秀なプログラマだ。あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！自分が開発していたVRMMORPGの世界に落ちまったみたいだ。何を言ってるか (ry。」

ゲーム系チート設定の異世界モノが書いてみたくなったのでチャレンジしてみます。

主人公はとある時点までは最強でもチートじゃありません。

## Module 1・エンカウント

俺の名前は、よしだたくろう吉田卓郎。

オタクでダサメン、彼女イナイ歴11年齢の27歳。

男子だけの高専から編入で国立の工学部情報系学科へ進学、青春時代をコンピュータプログラミングに明け暮れたナード（コンピュータオタク）である。

デート？ナニソレ食べられるの？というくらい女性には縁がなかった。

いいの、俺には二次元があるから。

とまでは言わないが、正直どう扱っていいかわからない女性という生き物と会話するよりは、わかりやすい結果が出るコンピュータをいじっている方が楽しい、というタイプであった。

健康維持のためのウォーキングはしているが、特に体を鍛えるという趣味もないため、筋肉は申し訳程度のガリ。

オタクの象徴のような眼鏡に、最近床屋にも行ってない感じのぼさぼさ黒髪。

ファッションセンスはまあ推して知るべし。

休日はその辺のイベントでもらったTシャツにジーンズというラフな格好が定番である。

入社時には申し訳程度にジャケットを羽織るが、その下は似たようなものだった。

お堅い企業なら怒られる格好かも知れないが、うちの会社はベンチャー系の若い会社のせいかな、結果さえ出せば何も言われない。がたがた文句をつけて才能ある若者に逃げられると困るのだ。

まあ、自分で言うのもなんだが、青春をコンピュータに捧げただけの技術は持っていた。

院生時代にコンテストに出したプログラムが入賞。

それを見たこの会社の社長にうちに来ないかと誘われて入社。

以来、ある程度自由に開発させてもらってきた。

天才とまでは言わないが、優秀なプログラマ、それが俺。

そんな俺がなぜか今、全速力で走っている。

足の下には緑、丈の低い草が目の前一面に広がっている。

日本じゃちよつとお目にかかれない光景。何しろ地平線が見える。

そして、背後には、虎。

いや、正確には虎に似たモンスター、ホワイトサーベルタイガー。

俺がこれまで開発してきたVRMMORPGに出てくるそいつが、俺を餌にしようと追いかけてきていた。

なんでこんなことに…なんて考える余裕もない。

俺はその爪と牙に本能的な恐怖を感じて全速力で逃げているのだった。

## Module 2・ユーザーインターフェース

俺にとって幸運だったのは、あるいは、ホワイトサーベルタイガーにとって不運だったのは、俺の体が一リアルなものではなく、ゲーム設定のものだったことだろう。

そして、俺のゲーム設定の体 プレイヤーキャラクター（PC）「タク・ヨツシー」の職業はファイター（戦士）でレベルは52。レベル10程度のPCが適正レベルであるホワイトサーベルタイガーは、「逃げる」を選択すればほぼ逃げられる相手であった。

果たして「逃げる」コマンドと同等だったのかはともかく、全速力で逃げる俺の背後でホワイトサーベルタイガーは徐々に小さくなっていき、やがて視界から消え、そして「エンカウンター表示」も消えた。

ぜいぜいと荒い息を吐きながらよろよろと立ち止り、思わず膝をつく。

この疲労感、肌を撫でる微風、踏みにじった草と泥から立ち上る匂い、それらは俺に「これが現実である」と訴えている。

だが、しかし、

「…マップオープン」

震える口調でつぶやくと、視界に地図が広がった。

赤い輝点がPCの位置を示す、ゲームのユーザーインターフェースそのままの画像。

周囲の地名を読み取り、そこが「シエランド草原」というゲームスタート地点である「ル・シエラ」という都市にほど近い場所である

ことを確認する。

ゲームを開始したプレイヤーは、この周囲でモンスターを狩って10レベル程度までレベル上げをすることが想定されていた。

「マップクローズ」

いったいどういうことか。

座り込んでいた俺は、地面に生えている草をちぎって口に含んでみた。

… 苦い。

確かに近年VR（仮想現実）の技術は大幅に発展していた。

頭につけるいわゆるヘッドマウントディスプレイは小型化軽量化無線化し、ちよつとした眼鏡くらいの大きさにまでなった。

入力した画像データのリアルタイム解析をし、映しこんだ手の動き、それとマイクからの音声を組み合わせてのコマンド入力は実用化して久しい。

俺の専門はその画像解析部分だった。

実用化したと言っても、大量のリアルタイムデータの解析はやはり重い。

特にゲームで処理が重いとユーザに嫌がられ売れない。

特定の手の動きを瞬時に解析して、コマンド入力につなげる、その動画像解析エンジンを書いたのが俺だった。

「魔法発動を手の動きでできるように、なんて無茶言いやがったよな」

数百種ある魔法が手の動きで発動する、というのはこのゲームの売

りであった。

単にコマンドとして覚えるだけでなく、実際に手でその動きをなぞらないといけないという、新システム、その肝となるプログラムを書いたのだった。

だからこそ、というか、そもそもこんな技術が実現されてないことはよく知っている。

視覚・聴覚だけでなく、嗅覚・触覚・味覚へ働きかけるデバイス（装置）などない。

いや、研究レベルならあるかもしれないが、このゲームのシステムに搭載されてはいない。

ここへ来る前の最後の記憶でも、俺が身に着けていたのは通常のマイク付きのヘッドマウントディスプレイだけだった。

一応顔や頭に手をやって、そのヘッドマウントディスプレイを探してみたが、なかった。

だが、どういう仕組みなのかわからないが、そのゲームで表示されていたメニューが目の端近くに浮かんでいる。

「…インベントリオープン」

いわゆる道具箱インベントリを開いてみると、中にはいくつかアイテムが入っていた。

上級傷薬に毒消し、攻撃力アップ（戦闘中のみ）といった見慣れたアイテムである。

試しに、HP回復機能がある「パン」を指でダブルクリックしてみる。

と、空中にパンが現れた。

一瞬空中にとどまった後、重力の法則に従って落下を開始する。  
俺は慌ててそれを受け止めた。

(いったいどこに収納されているんだろう…)

深く考えたら負けなような気がしたが、疑問だった。  
だいたい、これは食べられるのだろうか…恐る恐る齧ってみる。

乾パンのような味がした。



## Module 3・始めの一步

乾パンみたいな味のパンを齧りながら、ある意味見慣れたメニューをひとしきりいじっていた俺はため息をついた。

大した情報はない。

わかったのは、さつき確認したようにゲーム上のスタート地点であるル・シエラにほど近いシエランド草原のど真ん中にあること。装備は、ここのところずつと使っていたプレストアーマーにブロードソードといった、ファイターの標準装備にいくらかレベル相応のプラス補正がついたもの。

インベントリに入っていたのも、これくらいないと不便だろうと入っていた補助アイテム類と最後の戦闘で得たモンスターのドロップアイテムのみ。

後は、そこそこの持ち金といった感じであった。

8

ちなみにこのゲームでの通貨単位はガルーといい、Gで表示される。視界のメニューにはHP/MPの表示とともにGも表示されており、今は23452Gとなっている。

どこに入っているのかと思って調べてみると、腰のベルトにぶら下がった革袋（小）に入っていた。金色や銀色の硬貨が出てきて困惑する。

「まあ、確かに銅貨が二万枚もあったら重くていやだけどさ」

ぶつぶつ言いながら、試しに地面に数枚硬貨を置いて離れてみると表示が減った。

…どういう仕組みになっているんだろう。

インベントリの仕組みと同じで深く考えないようにし、表示を見ながら調べてみたところ、金貨が100G、銀貨が10G、銅貨が1Gにあたるということがわかった。  
内訳は、金貨230枚、銀貨40枚、銅貨52枚。

「確か設定では1Gが日本円の100円相当くらいだったから、200万くらいの持ち金があるわけか」

まあ、とりあえず金欠で死ぬことはなさそうである。

(使えるかどうかわからないけどなあ)

なお、他の地区についてのマップはまだ埋められてないのか空白で見ることができなかった。

元々このPCは動作テスト用に作ったもので、レベルも自分で上げたわけではない。

他の街や地区へ行くためにはいくつかのクエストをこなす必要があるが、当然それらもクリアしていないわけで、当然と言えば当然であった。

だってしょうがないじゃない、俺はプログラマであってテストじゃないんだもの。

誰にいいわけするともなく呟く。

アルバイトのテストの中には、リリース前のアルファバージョンであるにも関わらずプレイ時間が1000時間を超えると言う猛者もいたが、俺はあくまで動作確認時にしか入らない程度のプレイ時間だった。

ただ、開発者として、彼らの知らない設定情報などは知っている。ある程度は街中でNPCから聞くこともできるが、他はクエストをこなしながら知って行くような隠し設定もある。そういうクエストや設定がどの程度この世界の事情と一致しているかはわからないが…

（ル・シエラは確か、草原を貫く街道に交易拠点として作られ、発展してきた商業都市…だったか）

比較的文明が発達している大陸中央部にあるため、周辺の魔物は弱く、初心者の冒険者が開始するにはうつつつけの場所、という設定になっていた。

商人が中心となった自治都市で、複数の商人からなる議会により運営されている。

今の議長は、街でもっとも大きな商会の主であるルパード・エルモンド。

その程度は卓郎も記憶していた。

（まあ、行ってみて状況確認するしかないよなあ）

野っばらにいつまでもいるわけにもいかないし。

と、卓郎は周りを見回してため息をついたあと、立ち上がった。

色々とメニューをいじっているうちに時間が経ち、太陽はすでにだいぶ傾きかけている。

急がないと日が暮れてしまうだろう。

俺、もとい、タク・ヨッシーは、始まりの街ル・シエラへ向けて歩き始めた。

## Module 4・始まりの街ル・シエラ

始まりの街ル・シエラまでは迷わずに着けた。

まあ、マップを小画面表示にして常時確認しながら移動してきたので、迷いようがない、とも言つう。

頬を撫でる草原を渡る風も、日が沈みかけてだいぶ冷たさを増してきていた。

踏みしめる大地は鉄の靴の下でじよりじよりと音を立てる。

視界に重なるゲームのメニューは非現実極まりないのに、感覚はこの世界がリアルであると訴え続けていた。

ル・シエラを囲む石壁と門が見えてきて、俺は改めて緊張してきた。門へ続く街道には、数名の人影と馬車、馬などがちらほらと動いているのが見える。

あるものは門へと急ぎ、あるものは街から離れようとしている。

人間　ゲームでは定型の返事しかできなかったノンプレイヤーキャラクター（NPC）と呼ばれる彼ら。

特に役割を割り当てられてないモノについては、しゃべることもできないただ動くオブジェクト（物体）に過ぎなかった。

あの人々は、プログラムなのかそれとも本物のヒトなのか？

様子が変わるまでは、本物の人間と仮定して対応しておいた方が無難だろうな。

しかし、もし、本物の人間であつたら、ここはゲームではないということになる。

ゲームでないとしたら、ここは…

暗い気分になるのを、頭を振って振り払うと、俺は門へ向かって歩を進めた。

／＊／

「身分証明書を見せてください」

黙って街へ入ろうとして門番の兵士に止められた俺は身分証明書の提示を求められた。

黙って入ろうとしたのは、言葉が通じるか自信がなかったせいでもあるが、俺に「この街は初めてですか？」と聞いた門番の言葉は、少なくとも俺には日本語に聞こえた。

外国語でなくてよかった。

12

自慢ではないが、英語はからきしで、大学では第二外国語も数回落とした揚句にお情けで単位をもらったくらいのも言語音痴である。和製RPGであるこのゲームはしかし、最終的には全世界展開を目指すとかで、将来的に自動翻訳機能を搭載する計画もあったが、こちらは当然のように別のプログラマが担当していた。

あいんどとすぴーくいんぐりっしゅ。

いや、英語じゃない気もするが。ぐるぐるしながら構えていた言葉は宙に霧散した。

「いや、まあその…」

ゲームではこの街を基点として冒険を繰り返してきたわけだが、そ

んな設定が反映されているのかどうかもわからない。  
曖昧に言葉を濁す俺をうるん気に見た門番が、身分証明書の提示を  
求めたのが今、というわけである。

眉間に皺を寄せた胡散臭そうな目つき…

…ああ、すごく人間的です。

しかし、身分証明書の提示と言われて少し悩んでしまった。

この世界（？）の生まれでない自分にそんなものがあるはずが…

…あった。ぼむと手を打つ俺。

財布代わりの革袋（小）を漁っていた時に見つけた小さなプレート  
（板）を門番に差し出す。

プレートを受け取った門番が、その表面の文字を読み取ると、眉間  
の皺が消えた。

「冒険ギルド・ル・シエラ支部所属、ファイターLV52、タク・  
ヨッシーさんですね。」

確認しました、お通りください」

それは、プレイヤーならば誰でも持っている「ギルド登録証」だっ  
た。

所属ギルドと、職種とレベル、そしてフルネームが書かれている。  
冒険ギルドは、他のギルドに入る前の初心者ならば必ず登録させら  
れる基本的なギルドである。

特にル・シエラはスタート地点でもあり、冒険ギルドのル・シエラ  
支部といえば初期設定も初期設定と言える。

ギルドは冒険ギルド以外にも、商人ギルドや職人ギルドがあるが、

そうしたギルドに所属したことはない。  
だって、俺は（ry

まあ、そのギルド登録証があることを思い出したおかげで、無事俺はル・シエラへ入ることができた。

「ゲームでこんなチエックとか受けたことないけどなあ」

と、思つて門を振り返ると、やはり入ろうとしていた商人らしき人物が止められて、ひとしきり何かやりとりをしていた。

やはり、プレートのようなものを出してチエックを受けた後、さらに懐から銀貨数枚を取りだして渡している。

「税関？」

何度か海外にいったときの空港でのやりとりを思い出して、納得した。

ル・シエラは自治都市、つまり小さな国のようなものである。  
街に入るにはそれなりのチエックと、入国税みたいなものが要るのであろう。

ゲームではそういう細かいルールはうざいので省略されていたわけであるが、現実ならば当然ありそうな話である。

「現実ならば、か…現実なら、ね」

今日何度目かわからない落ち込み。

「ともかく、宿屋でも探すかー」

ぶるぶると頭を振って気を取り直すと、定番とも言える宿屋探しを開始したのだった。



## Module 5・青いグリフォン亭

宿屋を探そう。

そう思い立った俺は、路地裏の暗がりでもマップを開いた。

いや、実は大通りで突っ立って「マップオープン」とか操作を始めたら、

「おじさん何してんの？」

とハナ垂らしたガ（ry：もとい子供に声を掛けられたため、慌てて路地裏に入ったともいう。

周りを見回してみたら、大人の住人も不審そうに見ていたので、ぶつぶつ呟きながら空中に手を振る俺はかなり怪しかったのだろう。

なお、おじさん呼ばわりは、かなりショックだった。

6歳ほど歳の離れた姉が子どもを産んで、「おじさんですよー」と赤ん坊に紹介された時以来のショックとも言える。

27歳はおじさんじゃない！お兄さんだ！

こぶしを握り締め、誰ともなく宣言してみる。

が、そのこぶしは自分のものとは思えないほど大きくこつく、防具の一種であるグローブに包まれていた。

果たして今の自分の外見はどうなっているのだろうか？

疑問ではあったが、周囲に鏡になるものもなく、ひとまずその疑問は保留してマップに意識を戻した。

マップは現在シテイモードになっている。

先ほどまではフィールドモードだったが、街のアイコンをダブルクリックしてシテイモードに切り替えたのだった。

：まあ、そんな操作をしていたらガ（ry：子供に見とがめられたわけだが。

今は路地裏なので人目はない。

心おきなく手を動かして、マップを広域表示に切り替えた。

ル・シエラの全景が表示され、青い点がいくつかその上で緩やかに明滅する。

赤く輝く点はフィールドモードと同様にPCの位置である。

なお、ゲームではマップに他のPCがいた場合、黄色い点が明滅するようになっていた。

少し期待したのだが、黄色い点はマップには表示されていなかった。

（いるわけないか…）

それほど期待していたわけではないが、改めて確認してみると結構落胆するものだった。

もう何度目かわからないため息をかみ殺して、マップ上の青い輝点を確認する。

冒険者の宿「青いグリフォン亭」は、ゲームと変わらぬ位置にあった。

（えーっと、大通りに出て、2つ目の角を右に入ったところ、ね）

ゲームで見慣れた通りを歩き、宿にたどり着く。

そのたたずまいも、ゲームで何度も見たままであった。

ただ、看板と思われる板に書かれた文字と思われる文様は俺の知らないものだった。

じっとそれを見つめていると、「青いグリフォン亭」の文字がポツプツしてきたので、間違いはないようだった。ドアを開け、中に入る。

「いらっしやいませーお泊りですか？」

にこやかに営業スマイルで迎えてくれたのは、看板娘のレイチエルである。

「CGまんまだなあ」

「はい？」

しみじみと彼女を見て感想を述べると、レイチエルの目が点になった。

## Module 6 ・看板娘レイチエル

冒険者が利用する宿「青いグリフォン亭」の看板娘レイチエル  
レイチエル・ガーランドは、宿で応対するだけでなく、いくつかの  
クエストでも重要な役割を果たすため、他の名もないNPCに比べ  
て作りこまれたキャラクターだった。

人種は、北部に多いエルフの血を引くと言う北方人で、抜けるよう  
な白い肌と青い目、そして腰まで届く長いプラチナブロンドの髪を  
している。

服装は大陸中央部の女性の一般的な衣装であるワンピースのような  
服である。

ちなみに、とある開発者が猫耳にメイド服を主張したが、グラランド  
デザイナーに却下されたという逸話がある。

ただし、彼の切ない願いは一部かなえられ「レイチエルとメイド服」  
という特殊クエストが実装された。

クリアすると、猫耳カチューシャとメイド服が手に入り、一度だけ  
ですよ、とレイチエルが着てくれるらしい。

…当然だが俺はそのクエストをクリアしたことはない。

さらに念のために付け加えておくが、その主張をした開発者では断  
じてない。

「ええと、お客様？」

しみじみ脳内のグラフィックスと目の前のレイチエルと比べて感心  
していたら、レイチエルの表情が不信を通り越して不安にひきつり  
始めていた。

「おつと失礼。えーっと、前ここに泊ったことがある知り合いが、あなたが共通の知り合いに似てるって言ってたものでね」

「ああ、シージーさんって方？」

「そうそう、シージーって子」

適当にごまかすように言うと、レイチエルははにかむように笑った。

「そんなに似てるんですか？」

「うん、もう凄く似てる」

そっくりというか、どっちが本物というか。

「へー。会ってみたいですねえ」

「それはちよつと無理かもなあ」

何しろゲームの話だから。いや、ここがそのゲームみたいなんだけど。

「遠くから来られたんですか？」

「うん、すごく遠くから」

そうなんですなえとレイチエルはほほ笑むと、仕事を思い出したようだった。

再度、お泊りになりますか？と問うのへ、数日の滞在を依頼する。

「前金で3日分をいただきます。300ガルーになります」

「これで大丈夫かな？」

俺は、金貨を3枚革袋から取りだしてカウンターに置いた。

レイチエルはそれを手に取り数える。

「はい、確かにいただきました。

お部屋は2階の奥、211号室になります。

お出かけの際は鍵はお預けください」

金貨に問題はなかったらしい。

レイチエルは金貨を仕舞うと、部屋の鍵を渡してくれた。

いかにも鍵！といった風情の鉄製の鍵で、数字らしき文様が握りの方に刻んである。

看板と同じで、その文様を見つめていたら211という数字がポツプツしたので、数字で間違いないようだった。

「夜と朝はそちらの酒場で賄いが出ますのでご利用ください。

お客さんは鍵を見せていただければ無料で食べられます」

なんと朝食と夕食つきだったらしい。

ぐう、とお腹が鳴り、空腹だったことを思い出した。

## Module 7・望郷の念

俺はやんごとなき事情で切迫した状態にあった。

青いグリフォン亭1階の酒場兼食堂で夕食という、どろっとしたシチューにパン、ポテトサラダみたいなすりつぶした芋ペーストを小皿に盛った料理を食べたのが小一時間前。

上から入れれば下から出て行くものがある。

それが人間の生理、世界の摂理である。

しかし、その生理現象を解消するための場所が見つからずに俺は困惑していた。

部屋には見当たらず、宿屋の他の場所にあるのかと3階まである宿屋を各階見て回ったが、それらしきものはなかった。

そして、時間が経てば経つほど、状況は切迫してくる。

蒼白になりながら、いつそ外でと、宿から出ようとする俺を、レイチエルが呼びとめた。

「お客様、何かお探しですか？」

きよろきよろとあちこち覗きこんでいた俺に声をかける機会を伺っていたらしい。

いや、声をかけたそうにしているのも、聞いた方が早いのもわかってはいたのだが、内容が内容だけにうら若い乙女には聞きにくかっただけのことである。

いっそおばちゃんだったら遠慮なく聞けたのだが…

ええい、背に腹は代えられない。

「ええと、その、お手洗いはどこですかね」

思い切って尋ねてみたが、レイチエルは首をかしげただけだった。

「お手洗い？」

「あの、そのトイレというか便所というか」

幾分婉曲表現で伝わらなかったのかと、直接的な単語に切り替える。

「といれ？」

それでもわからないらしく、俺は途方に暮れた。

「あの、その、ええと生理的なナニを出したいわけで」

何この羞恥プレイ。

彼女イナイ歴〃年齢のどうt（ryにはきつい仕打ちだった。  
顔が熱く、自分が真っ赤になっているのがわかる。

「ナニって何を…ああっ」

腹を押さえ、顔を真っ赤にした大人がもじもじしているのを見て、  
ようやくレイチエルにはわかったようだった。  
にっこり笑って2階を指差す。

「お部屋に壺がありますので、そちらにどうぞ。」

お客様が部屋を出られた後、係の者がベッドメイキングのときに  
片付けますのでご心配なく」



「つ、壺!？」

部屋に戻ってよく見てみると、確かに大きめの壺が置いてあった。

やむなくその壺で生理現象を解消した俺は、しみじみ日本へ帰りたくなった。

安西先生！ シャワー温水便座付水洗トイレが恋しいです！

不幸中の幸いは、蓋がしてあったことか…

…文字通り「くさいものには蓋」をして、その壺のことは意識的に思い出さないことにした。

壁際で存在感を放ってる気がするけど、気にしないっいたら気にしません！

次に、装備を脱ぐことにチャレンジする。

…これ、どこをどう外せば脱げるの？

標準的な現代日本人に、鎧の着脱に関する知識などあるはずもない。やはり小一時間格闘して脱ぎ終わると、ようやくベッドへ崩れ込んだ。

…脱いだはいいが、明日装備できるのだろうか…

「つ、疲れた…」

体力的に疲れたわけではない。

そう、HP表示は満タンになっている。

だが、精神的には非常に疲れていた。

日本ではありえない土地、日本人ではありえない人々、見慣れない生活風習に食事。

「どう考えても異世界だよなあ」

自分が動かしているこの体でさえ見覚えのある自分のものではない。ごつごつした大きな手を広げて見る。

グローブを外した素肌は、見慣れた肌色ではない。

レイチエルのような白い肌でもない。

浅黒い、褐色の肌である。

俺は、キャラクター作成の時に、南方系の人種を選んだことをおぼろげに思い出した。

「ステータスオープン」

メニューがあつたことを思い出して、ステータス表示画面を開くと、人種の欄に「南方人」と表示があつた。

南方人は、ドワーフの血を引いていると言われ、浅黒い肌に黒髪、頑丈な体格を特徴としていた。

確か、体格や筋力の成長に補正がかかるため、ファイター系の職業を好むプレイヤーが選ぶだろうと見込まれていた。

というか、ファイターならこの人種がお勧めということを選んだのだった。

「ゲームでの設定のまんまなのかね……」

どうしてこんなことになったのか。

ようやく、俺は、手がかりになるかも知れないと、この世界に来る前の最後の記憶を振り返ることにしたのだった。

## Module 7 望郷の念（後書き）

少し、装備周りの記述を追加しました。

生真面目に手動で脱いでますが、装備メニューを忘れてるっぽい。

## Module 8 ・プロジェクト・グラン・ロウレル

その日は夕方から打ち上げだった。

それまで開発していた仮想現実多人数参加型オンラインロールプレイングゲーム（VRMMORPG）「グラン・ロウレル（Gran Laurel）」が無事ベータリリース、つまり試験運用とはいえ一般公開される運びとなり、そのためのセットアップを完了したお祝いであった。

ここに至るまでの道のりは長かった。

具体的な構想からは5年と言ったところだが、このゲームの開発は社長の学生時代からの悲願とも言えるので、そこから数えれば20年とも言っているのかも知れなかった。

なんでも、CGはワイヤーフレーム、通信といえば電話回線、なんて時代に、大学にしかなかった研究用ネットワークを通じて、文字を中心として構成された「グラン・ロウレル」の前身であるマルチユーザゲームに嵌ったらしかった。

研究用ネットワークを遊びに使っていいものかとも思わなくもないが、それも社会の研究と言え言えるのかもしれない。

「世界観がね、しっかりしてて、魅了されたんだよ」

まあ、ストーリーそのものは、世界を滅ぼす魔王を封印するために、プレイヤーが一丸となって協力し、魔物を討伐するという、ありがちなものだったらしいけど。

今回の「グラン・ロウレル」でもそうだけれど、NPCの設定が詳細で、クエストを進めていくと彼らの織り成す物語が生き生きと再生されていく、そういう物語性に魅了されたのだと、社長は言っていた。

「また、彼らに会いたいと思ったんだ」

そのゲームのデザイナーで開発者「剣充」<sup>ツルギみこと</sup>に出会ったのは運命だった、と社長は力説した。

とあるコンシューマーゲーム機のお披露目イベントで隣り合って名刺交換したとき、すぐにその名前に気が付いたという。

かつてのゲームのファンだったこと、続編を期待していることを述べ、「続編の予定はないんですか？」と尋ねる社長に、剣氏は苦笑したらしい。

「構想自体はあるんですけどね、何しろ資金や人材の当てがなくてその言葉に飛びついて、ぜひうちで作らせてくださいとその場で拉致ってきたという。

強引というか、大胆というか、社長というのはそういう思い切りがないといけないのかもしれない。

ともあれ、その剣氏を統括であるグランドデザイナーにいただいて「グラン・ロウレル」の開発はスタートしたのだった。

「グラン・ロウレル」という名称も剣氏がつけたものである。

その名前は、ゲームの舞台となる世界の名前、ということであった。

「まあ、『偉大なる大地』くらいの意味なんだけどね。『母なる地球』みたいなもんかな」

ロウレルというのは大地の女神の名前でもあるらしかった。

「グラン・ロウレル」には緻密な設定があり、何か疑問が出ると、

それらについては全て剣氏が膨大なデータを提供しながら説明してくれた。

たとえば、どんな風景にしたらいいですかねえ、と聞いたCG担当者の目の前に、各地の植生データがどん、と置かれたということがあった。

見慣れない植物の名前には形状のイラストや特徴の記述もついでいて、CG担当者は目を白黒させながらそれらを立体にモデリングしていた。

それをすべて一人で考えたとすれば、すごいというか、マニアックというか。

まあ、RPGの元祖とも言える某有名小説にも壮大かつ緻密な設定があったので、こういうものなのかも知れないと納得してはいたが。

剣氏のすごいところは、その緻密な設定ではなかった。

前身のネットワークゲームは彼ひとりで作り上げたものだった。

そのシステムを拡張することにより、文字データ処理レベルでの基礎システムは完成していると言っても良かった。

「でも、画像処理とかはからきしでね」

だから協力者が要る、ということまで白羽の矢が立ったのが、当時院生だった俺だった、というわけだ。

その他にも音声認識部や、プラットフォーム依存部分の専門家などが集められた。

総勢20名の開発チーム、それが「プロジェクト・グラン・ロウル」だった。

そのメンバーだけでなく、都合のつくアルファバージョンのテスト

1まで加えた30名ほどの大所帯で、18:00から行きつけの飲み屋で打ち上げという名の飲み会が行われたのだった。

## Module 9 ・ヘビータスター千鳥

「俺は今猛烈に感動しているうつつ」

乾杯の音頭をお願いしますと幹事に振られた社長が、ひとしきり耳タコなグラン・ロウレルへの熱い想いを語るうとする。それを、まあまあ、と制したのは剣氏であった。

「ビールの泡が飛んじゃいますから、短めに、ね」

温和に微笑むので、社長はこほんと咳払いをした。

「あーでは、短めに。」

皆さん、お疲れ様でした。そしてありがとうございます！  
ついに、我々のゲームをベータリリースまでこぎつけることができました。

もちろん、これで終わりというわけではなく、  
正式リリースまで、また正式リリース後にもまだまだ皆さんの力  
が必要です。

これまでと同様に皆さんのお力をお貸してください。

ともあれ、今日は、そんなことは忘れてお楽しみください。

やろつども、今日は俺のおごりだあ！

かんぱーい！

「「「かんぱーい！」「」」

どこの山賊だ、的な結びだったが、場は盛り上がった。

テーブルの各所で乾杯という声とともに生ビールのジョッキが打ち  
合わされ、

料理をつつきながらの歓談へと移っていった。



ひとしきり食べ物が消化されたあとは、2階の座敷なので、ジョッキを持ってうろつくものも出てくる。

「吉田さん、飲んでますかあ」

そう言いながら俺に近づいてきたのは、山口千鳥やまぐちちとじ アルファリリース版テスターのひとりだった。

「え、ジュースなんですかあ」

俺の手元を覗き込んで意外そうな声を出す。

「ん、ああ、スクーターで来てるからね」

「えー今日くらい、徒歩で来ればよかったのにー」

僕なんか、わざわざ電車にしたんですよーいつも自転車なのに

「はは、そうすればよかったけどね。寄るところもあって」

まあ、実のところ下戸で、スクーターは言い訳のために乗ってきてたりするんだが、

わざわざ説明する必要もないので黙っておく。

千鳥が、そうなんですかあと言いながら、ビールをすすめるのへ、

「山口さんは、年齢的に大丈夫なの？」

と思わず聞いてしまう。

僕、という一人称を使っているが、千鳥は女性である。

しかし、童顔でつるべ（ry:もとい女性的な凹凸に多少欠ける体型の千鳥は、ぱっと見高校生くらいにしか見えない。

「あ、ひどーい。これでも、今年の2月に20歳になったんですよ

「

ぷーっと膨れる。

そういう動作がさらに子供っぽさをかもし出すわけだが、  
と思ったが、これ以上藪をつつくこともないと口をつぐむ。

「でも、山口さんがこういう場に参加するって珍しいね」

「や、だって、今日は剣さんが参加されるって言うから。

参加しない手はないっしょ！

剣さんですよ、剣さん！！！！

我らがグラン・ロウレルの生みの親、グラウンドデザイナー。

もうね、拝みに来たわけですよ！！」

なるほど、ファンってわけね、と納得する。

こう見えても、彼女はディーブなネットプレイヤーで、アルファリ  
リースのテスターの中ではダントツにプレイ時間が多い猛者であっ  
た。

ちなみに、3番目にプレイ時間が多いのが、社長らしい。

それは会社としてどうなの？と思わなくもないのだが、

「俺が面白いと思えないゲームが売れるわけないだろう！」

と胸を張ってプレイしているという。

…まあ、一理ある…のか？

剣氏に会いたいからという理由があったにしても、彼女がこういう  
場に出てくるようになったということに、感慨深いものがある。

(だいぶ回復したってことなんだろうなあ)

社長の知り合いの子供だという千鳥は、そのエキセントリックさから、高校時代にいじめを受け、引きこもってしまったという。彼女が唯一外の世界との接点を持ったのがネットゲ、オンラインゲームだった。

が、まあ良くある話で、そのまま廃人化。心配した親が、どうせネットゲに嵌るなら、と、うちの社長に相談してアルファリリースのテスターとして雇ってもらった。という事情を、とある機会に聞いていた。

「今、レベルどれくらいなの？」

「レベルっすか？まだ、勇者のLV12ですよ」

「えっ！勇者にジョブチェンジできたの?!」

「もっち、よゆうっすよ、よゆう」

千鳥は軽くブイサインをして見せたが、勇者というのは基本4職業をLV50まで上げたあと転職できる上級職をさらにLV80まで上げて初めて転職できる職業のはずだった。

レベルが上がれば上がるほど、経験値を稼ぐのは大変になるので、そこまで到達するにはかなりのプレイ時間と、熟練が必要なはずであった。

大学にも進学せず、全ての生活をゲームに費やしているわけだから、ありえる話ではあるが…それでも。

「すごい」

と素直に感想を述べると、や、そんなことないっすよ、と千鳥が照れた。

と、剣氏の隣にいたメンバがよそへ移動したことに気が付く。

「あ、ほら、剣さんの隣が空いたから行ってきたら」

勧めると、千鳥が動揺する。

「や、僕みたいなパンピーがそんな、恐れ多い」

恐れ多いってなんだ。

まあ、遠慮せずに、と千鳥を連れて、剣氏の隣へ向かう。

空いた席の隣のメンバが気を利かせて、よそへ移動してくれた。

感謝、と会釈して、千鳥を剣氏の隣へ座らせ、俺はその空いた席に座る。

「こんばんわ、剣さん。」

この子、山口千鳥さん、知ってますよね」

「お、吉田君、こんばんわ。」

あ、その子が山口さんか。

名前はよく知ってる。

すっごい遊んでくれてるよね」

へビープレイヤーである千鳥は、テスターの中でも有名であった。

「あ、あの、グラン・ロウレル、すげえ好きっすから」

剣氏は、社長と同じ40代のはずだったが、30代前半くらいに見える。

童顔というわけではないが、雰囲気が若いのだ。

少し長めの黒髪に、知的な風貌は、銀縁のメガネでさらに強調されていた。

控えめだが上品なスーツを着たその姿は、どこかの大学の教授と言われても納得できる風情だった。

そんな、憧れのデザイナーに微笑みかけられて、千鳥は真っ赤になっただ。

答える声が、超上ずっている。

「あの、その、このゲームを作ってくださいって、ありがとうございます  
ます」

それでも、これだけは言わなくちゃ、と思っていたらしい台詞を言う  
と、ぷしゅうという感じで力尽きた。

「こちらこそ、ありがとうございます。」

そう言ってもらえるのが、作った者としては一番嬉しいんですよ

千鳥はその笑顔に撃沈した。

僕ちよつとトイレ！と叫んで戦線を離脱する。

席を立つ理由として、それは女の子としてどうなんだ、と思つ俺。

剣氏はやはり温和に笑っていた。

Module 9 ・ヘビーテスター千鳥（後書き）

ボクっ娘登場。

Module 10・シナリオ「大魔術師の帰還」(前書き)

クエスト名調整しました。

レベルも調整…

## Module 10・シナリオ「大魔術師の帰還」

それからしばらくして、俺はテスターたち数名に囲まれていた。

社会的な事情で、チーフプログラマという立場についている俺は、テスターたちと接する機会も比較的多く、かなりの面子と顔見知りになっている。

そのため、余り面識のない他の開発者より話かけやすいのだろう。ちなみに、千鳥は限界だったのか、トイレから帰ってくると自分の席に戻ってしまい、それきりであった。

「俺ら、まだクビになったりしないですよね？」

古参のテスターのひとり、鈴木悠司という大学生が幾分心配そうにそんな風に聞いてくるのへ、

「だいじょぶだいじょぶ。」

最初の乾杯のときに社長も言っただけど、

これで終わりってことはないから」

笑って否定する。

パッケージソフトのゲームと違って、オンラインゲームというものは、開発してはい終わり、とは行かない。

日々の運営もちろんだが、新しい企画を順次組み込んでいって、興味を持続させないと、飽きっぽいユーザたちは、すぐ新しいゲームの方へ行ってしまう。

そのために、グラン・ロウレルでは、定期的に新しいシナリオや、それに必要な新機能を搭載していく計画になっていた。

それらのテストにまだまだ君たちの力が必要なんだよ、と、説明す



る。

「新しいシナリオってどんななんですか!？」

ほっとした悠司を押しつけるようにして、やはり大学生の谷崎林太郎が、興味深々といった風情で聞いてくる。

「いやいや、そこは自分で発見しないと面白くないだろう」

「そうだそうだ、ネタバレいくくない!」

押しのけられた悠司が、林太郎にぶーぶー言う。

彼らは、大学は違ったが、学年が同じで開始時期が近かったということ、テスターの中でも早くに仲良くなったようだ。

ゲームでも2人を含むパーティがよく組まれている。

「ちょっとぐらいいいじゃん。

ね、吉田さん、ヒントだけでもw」

「うーん、どうしようかなあ」

林太郎が食い下がってくるのに苦笑する。

「そうだなあ、君らはもうクエスト「勇者志望者募集」はクリアしたのかな？」

悠司だけたちだけでなく、その場にいるテスターたちは全員頷いた。おお、と心の中で驚く。

あのクエストは、ベータリリースでのストーリーシナリオとしては最後のシナリオである「魔王の胎動」のトリを飾るクエストにあり、適正レベルは上級職LV75以上、しかも4人以上でのパーティを組んでのクリアが推奨されるという難易度を誇る。

あれをクリアしたということは、ここにいる4人はそのレベルをクリアしているということで、かなりのヘビープレイヤーだということだ。

もちろん、テスターがヘビープレイヤーばかりではバランス調整がおかしくなるので、そうでないテスターもいるが、こうした内輪の飲み会に声をかけたらやってくるということは、熱心にやりこんでいるということでもあるのだろう。

「じゃあ、ちょっとだけ教えてもいいかな」

「やった！」

林太郎だけでなく、全員が目を輝かす。

悠司も遠慮はしていたが、やはり知りたかったのだろう。

俺はヒントだけを教えてやることにした。

「ヒント。次のストーリーシナリオの名前は「大魔術師の帰還」と言います」

4人のテスターから、おお、という声があがった。

「大魔術師って、あの大魔術師ですよね？」

それまで黙っていた、松田仁という名の青年が聞いてくるのへ、

「まあ、この時代、大魔術師といえば一人しかいないねえ」

と、にやにやしつつ答える。

そう、この時代のグラン・ロウレルで大魔術師と言えば一人しかいない。

かつての戦いで、勇者を魔王の元へ導いた、大魔術師。

「でも、彼は確か、20年前の魔王との戦いで、封印には成功したものの、

勇者とともに姿を消してしまったんですね」  
「うんうん」

そのせいか、本来であれば100年は持つはずの封印が破れかけていて、各地に魔物が増え始めているということがわかる、というのが、クエスト「勇者志望者募集」の中身だった。だから、彼らはそのことを知っているはずである。

『各地で魔王の封印から漏れ出た力を受けたモンスターが増え、通常的手段では殺すことができないものも出てきた。』

そうしたモンスターは、勇者の特技でしか滅ぼすことができない。そうした事情が明かされて、このクエストをクリアした君たちならば、とパーティのメンバたちは勇者へ転職が可能になるわけだ。

「そうした状況で、かつて魔王を封印した大魔術師が、満を持して帰還するわけさ。」

今度こそ魔王を確実に封印するためにね」

おおー、と興奮の声があがる。

そのメインストーリーである魔王封印をおこなう特別クエストの参加パーティの選抜コンテストや、

一足先に復活してきた、魔王の副官モンスターと彼らが率いる魔王軍との多人数によるレイド戦イベント、  
そんなイベントがすでに色々企画されている。

ベータリリースではまだそれらの搭載は先だが、開発プランチのアルファリリースではもちろん先行して搭載されていくことになっている。

そのうちいくつかはボツになるかもしれない。

「ま、たくさん戦ってもらつことになつてるから、よろしく」

俺がにやりと笑つと、4人はうひいと笑いながら笑つた。

「え、お手柔らかにお願いしますよ」

「クエストの難易度を決めるのは、剣さんだからなあ

剣さんに頼むといいよ」

そう言いながら、その剣氏の方へ目を向けると、いつの間にか席を移動して、千鳥と話していた。

ゆっくりと話しかける剣氏に、顔を真っ赤にした千鳥がしどろもどろに受け答えしている、といった感じのようだ。

「いいなあ、俺も剣さんと話したい」

それを見た林太郎がうらやましそうに言う。

そして、行った端から、よし、俺行っちゃうぞーと移動していった。

俺も俺も、と他の3人が続く。

乱入された千鳥は、ほっとしたような残念なような複雑そうな表情をしていて、俺は、おやおや、と苦笑したのだった。

## Module 11 ・ビルドミス(前書き)

この話ほど、マニアックな用語が出てきて読みづらいかもです。  
すみません。

## Module 11・ビルドミス

その夜の月はとてもきれいだっただ。

満月で快晴、青白い月は冴え冴えと輝いて、いつもは薄暗い会社までの道を照らしていた。

打ち上げという名の飲み会は22時に解散した。

二次会ということで、開発者グループからはさらに飲み、悠司らテスターたちからはカラオケの誘いを受けたが、俺はどちらも辞退した。

飲めないから、ということもあつたが、思い出したことがあつたのだつた。

(やつべー)

チーフプログラマである俺は、ソースコード、つまりプログラムを構成するファイル群の管理もしている。

それらの人間が読める形で書かれたファイルを、コンパイル、つまりコンピュータの言語に翻訳し部品にして、さらにそれらを組み上げること、また組み上げられたものをビルドという。

ベータリリースのビルドからは、開発プランチには含まれているいくつかの特殊なコードが取り除かれることになっていたのだが、うっかりして残したままにしていたことを思い出したのだつた。

ベータリリース、つまりシステムの一般公開は明日昼の13:00。そのため準備は朝の10:00からの予定になっている。

それまでに、正しいビルドに交換しておかなければならない。

スクーターを会社の駐車場に置いてきたこともあり、俺はついでに

その作業をすることにしたのだった。

／＊／

「あれ？誰かいるのかな？」

会社に入ろうとして、ビルを見上げた俺は、俺たち開発部隊の部屋の明かりがついていることに気が付いた。

確か全員打ち上げに参加して、その大部分は二次会になだれ込んだはずだが…

俺は首をかしげた。

誰か忘れ物でもして、取りに来たのか？

社員証兼用のカードキーで入り、その部屋に向かう。

全員退出時には必ず施錠するはずの開発部屋の鍵は開いており、不審は募った。

開けて覗き込んでみるが、誰もいない。

「誰かいるのかー？」

明かりが煌々とつきながら、しん、とした部屋には動きはなく、俺は頭を掻いた。

消し忘れに閉め忘れか？無用心な…

まあ、いないものはしょうがない。

当初の目的を思い出して、自分の席に座り、マシンを起動する。

黒いアルミボディにデュアルコアプロセッサ、3Dグラフィックボード搭載の自作マシン。

去年、前任のチーフプログラマが一身上の理由で退職して、お鉢が

俺に回ってくることになったときに、せめてこれくらいはとわがままを言って揃えさせてもらったパーツでできている。

自慢のマイマシン、名づけてBLACK-RX!

重たい3DCGもさくさく動く、巨大プロジェクトのビルドも一瞬さ

もちろん、2つのマルチディスプレイで、一方にクライアント（ゲームの画面）を立ち上げながら、もう一方でサーバ用のターミナル（端末）を表示することができるんだぜ。

へいへい

…いや、すまん。ごほごほ。

グラン・ロウレルは、オーソドックスなサーバ・クライアント型のシステムになっていた。

つまり、サーバマシン上でプレイヤーのステータスや位置といったデータを集中的に管理するサーバプログラムと、プレイヤーのパソコン上でそれらの情報をグラフィカルに表示し、プレイヤーからの入力を受け取ってサーバプログラムと通信をおこなうクライアントプログラムという、標準的な構成である。

サーバプログラムの実行を外部に委託するというクラウドサービスの利用も検討されたが、剣氏が書いたコアである状態管理モジュール部分の移植が難しい、ということでお流れになった。

そんなに難しいのん？と、該当箇所のソースコードを覗いて見たのだが、アセンブラという機種依存性が高く移植しにくい、その代わり処理速度を速くすることができる言語で書かれていたので納得した。

俺は、端末プログラムを起動すると、サーバマシンにログインした。



```
「make_gi_beta」と
```

ちよこちよことエディタで設定ファイルをいじり、ベータリリースから不要な部分を取り除いてから、ビルドを開始する。

まっさらの状態からの、いわゆるクリーンビルドなので、ちよっと時間がかかる。

俺は、ログが流れていくのを眺めながら、ふと思いつて別の端末プログラムを起動した。

```
takuro@gil_srv$ who
```

と、このサーバマシンに誰がログインしているか調べるコマンドを打ち込む。

画面に出力される、俺、ともう一人がログインしているという情報。

```
mtsurugi pts/0 20xx
-0x-xx 22:02 (pc01.gil-xx-xx.c.o.j)
takuro pts/1 20xx
-0x-xx 22:34 (pc03.gil-xx-xx.c.o.j)
takuro pts/2 20xx
-0x-xx 22:42 (pc03.gil-xx-xx.c.o.j)
(p)
```

そこには剣氏のユーザ名が表示されていた。

## Module 12 . アルファ版グラン・ロウレル

剣氏のユーザ名を確認して、俺は眉をひそめた。

顔を上げて、窓際の剣氏の机を見ているが、もちろん、誰もいない。その表示は、しかし、その机に設置されているパソコンからログインしている、ということを示していた。

(ログインしたあと席を外したのだろうか)

もしかすると、俺が来た時にちょうど入れ違いになったのかもしれない。

トイレとか、コンビニへ買出しとか。

(トイレにしちゃ長いけどな)

俺が作業を開始してから、すでに15分以上の時間が経過している。俺は、剣氏の作業状態を確認しようとコマンドを打ち込んで、さらに眉をひそめた。

```
takuro@gl|srv$ ps -u mt surugi
PID TTY          ?          00:00:00  sshd
25362
25363 pts/0      bash
25364 pts/0      gl|a|p
ha
```

グラン・ロウレルのアルファ版サーバプログラムが剣氏のユーザ権限で起動されていた。

(なぜ、このマシンで?)

このサーバマシンは、本来ベータリリースのためのもので、アルファ版サーバプログラムを動かす予定はないはずだ。

というか、そういう余計なものを動かしてもらっては困る、というのが本音だ。

ただ、何かグランドデザイナーとして確認したい、ということかも知れないので、うかつにこのプログラムを止めるわけにもいかない。

ちょっと失礼して、剣氏のユーザ領域にあるソースコードからバージョンを確認した。

どうも最新バージョンのようだ。

手元のプログラムの中から対応するアルファ版のクライアントソフトを探す。

設定をいじること、この動いているアルファ版グラン・ロウレルに接続することができる。

軽く起動してみると、データ自体は開発版のものそのままのようであった。

ユーザ認証後の初期選択画面には、こここのところ使用しているファイターのキャラクターが選べる状態で表示されていた。

名前やレベル、位置情報が最後に終了したときの記憶と一致する。

「データは開発用サーバからひっぱってきてるみたいだな」

ネットワークの接続状況を調べてみると、そのようであった。

開発用サーバにもログインして、状況を調べてみる。

ここには現在俺しかログインしていなかった。

また、こちらではアルファ版のサーバプログラムは現在動かされていない。

ふむ。

剣氏が外部からゲームにログインしているなら、剣氏のキャラクターが今いる場所へ飛んでゲーム内で直接事情を聞いた方が早いかもしれない。

そう判断した俺は、データベースに直接アクセスして、現在ゲームにログインしているユーザの場所を取得することにした。

一応、グラン・ロウレルにはフレンドという仕組みがあつて、友人であると登録しあつた相手であれば、直接チャットできたり、相手のキャラクターのいる場所に転移できたりする。

だが、残念なことに、俺のキャラクターは最近作つたばかりで、他の開発者やテスターのキャラクターとフレンド登録をしてはいなかった。

フレンド登録をするには、相手のキャラクターを検索して、登録申請を送つて承認されるのを待つ必要がある。

その作業をするのが面倒くさかつたので、開発者ならではの方法で調べることにしたのであつた。

```
「select uid,areaid,mapid,x,y  
from tbl_login|user;」と
```

一般人には謎の呪文のような、データベース問い合わせ言語という文字列を打ち込んでデータを引き出す。

結果は…

ログインユーザは一名のみ。

ユーザIDはJP00000021。

この位置は…数値ではさすがにわからないので、仕様書ファイル群からマップ情報ファイルを開き、該当箇所を探す。

「エリアE S 0 2、マップ0 0 3 2…大魔術師の塔1 2 F、このX座標とY座標はえーっと」

その座標が示している場所には「実験室」という名称が書かれていた。

## Module 13 : 大魔術師の塔

本格的にゲームに潜ることにした俺は、画面出力をヘッドマウントディスプレイに切り替えて、それを装着した。

メガネのようなその両脇のビデオカメラで両手が認識されるように微調整した後、ゲームを開始する。

「ゲームスタート」

目の前に、グラン・ロウレルの世界が広がる。

このディスプレイは立体視に対応しているため、リアル感・没入感  
はなかなかのものである。

開始した位置は、前回セーブして終了したシエランド草原だった。

ここから、剣氏がいるとみられる大魔術師の塔までの道のりは遠い  
というか、このキャラクターではクエストをほとんどクリアしてい  
ないので、まずそもそも移動できない。

フレンド登録していれば飛ぶこともできるが、それもしていない。

じゃあどうするのかって？

ちっち

こういうときのための開発者の強い味方「デバッグモード」ですよ。

開発中のプログラムには、プログラムの状態を直接見たり、いじつ  
たりすることのできるモードが存在していることが多い。

グラン・ロウレルのアルファ版にもそのモードがあった。

もちろん、ユーザにそんな機能が悪用、つまりチートに利用される  
と困るので、ベータリリースからは取り除かれている。

(今さっき取り除いたんだけどな！)

そう、チート防止のためにその機能を取り除くのを忘れていたのであわててさっき取り除いたのだった。

ゲーム開始前に、ビルドの終わっていた正式版と置き換えたからばつちり、のはずである。

(…危なかった)

もちろん、デバッグモードに入るのは簡単ではないのであるが、世の中には探し当てる猛者というのが必ずいるものである。

ともあれ、今はその機能を存分に活用させてもらうつもりだった。決められた特殊な手の動きをおこなない、

「デバッグモードオープン」

メニューを開く。

一般プレイヤー用にわかりやすく作られたゲームの画面と異なり、それは素っ気無いただの項目と数値の羅列である。

俺のキャラクターの現在のステータスデータ、位置データなどが並んでいる。

俺は、位置情報を書き換えると「更新」ボタンをクリックした。

/\* /

出現したのは、大魔術師の塔12F「実験室」の前の通路だった。マップで間違いないことを確認してホッとす。

「実験室」内部に直接飛ばなかったのは、オブジェクトやキャラクターとの座標が被ってバグってしまうというような事故を避けたかったからである。

一度壁に埋まって抜けなくなったことが…

現実であればノックしてから入室するところだろうが、ゲームにはそういう機能はなかった。

「お邪魔しマース」

呟きながら、扉を開ける。

そこには、キャラクターが二人いた。

(二人?)

データ上は一人しかいなかったはずだが、と思いつつ様子を伺う。

戦士風の鎧を着た背が低めの女性キャラクターが一人。

頭上に浮かぶキャラクター名は「ミスティ・バード」。

立っていたそのキャラクターは、こちらに気が付いたのか、手を振る挨拶を送ってきた。

そして、魔術師風のローブを着た男性キャラクターが一人。

頭上に浮かぶキャラクター名は「ミイ・トウル」。

しかしこちらは、名前の色がプレイヤーキャラクターを表す黄色ではなく、NPCを表す青色になっている。

そう、まさしく、その名前はこの塔の主、大魔術師の名前であった。

そして、その大魔術師はしゃがんで床に何かを描いていた…魔法陣？



タク・ヨツシーって、もしかして吉田さん？

「ミステイ・バード」からプレイヤー間の1対1通信であるダイレクトメッセージ(DM)が飛んできた。

そうだよ。君は？

山口ですー。吉田さん、こんなところで何してるんですかー？

何してるのかはこちらが聞きたい。

そう応えようとしたところで、男性NPC「ミイ・トゥール」が立ち上がった。

俺に気づかずに、手にした巨大な剣を掲げて、呪文の詠唱を始める。

「アルロウレリア・ジュラル・デイクス・ミイ・トゥール…」

その声に反応するように、魔法陣が光を放ち始める。

え、もしかして、これって何かやばいんじゃないの？

焦るが、どうしていいのかわからない。

ミステイ、もとい千鳥は焦ってないようで、ちょっと困ったような表情でこちらを見ている。

えーっと、これは何してるの？

詠唱を終えた大魔術師が大剣をおろして、初めてこちらを見る。

その目が驚愕に見開かれ…

…世界は光に包まれた。

Module 13 : 大魔術師の塔（後書き）

ようやく異世界へw

一段落したので、一休みします。

## Module 14 ・現状の整理（前書き）

1話が短いすぎるらしいので、ちょっと長めにしてみました。  
前のものをまとめるかどうかは未定です。

## Module 14 ・現状の整理

目を開けると朝だった。

…回想しているうちに寝てしまったらしい。

目の前には、見知らぬ天井。

と、けっこううるさくなってきたメニュー。

これ、消えないのかな。ゲームではオフにできた気がする。

「メニューオフ」

ボタンがあった。ぽちっとな。

おお、消えた！…メニューオンボタンだけ残ってるけど。

まあいいや、と妥協して、むっくり起き上がる。

見回して確認するが、昨日夜の記憶のままの「青いグリフォン亭」の部屋のままだ。

相変わらず、例の壺も壁際に鎮座されておる。

…またあれを使うのか…

起きたら俺の部屋で、夢落ちでしたー、なんて展開になって欲しかった。

戻りたーい戻れなーい

…ふう

今日は何回ため息をつくことになることやら。

ええい、がんばれ俺。

ぺちぺちと頬を叩いて気合いを入れる。

生きてるからには食って寝て稼がねばならぬ。

そして、がんばって故郷に帰るんだ。

昨夜色々大事なことを思い出したような気がするの、一歩一歩進めて行こう。

うん、えいえいおー

空元気も元気の内、と気合を入れる。

…さしあたっての課題は、これかな  
と、俺は床に散乱した装備を見た。

/\* /

ブレストプレートと格闘すること数十分後、俺は装備メニューを思い出した。

メニューを開いて、体に装着を選ぶ。  
と、あらあら不思議、あっという間に完璧装備。

…俺のこれまでの苦勞は何？

昨夜の脱ぐときの苦勞も思い出す。

脱ぐほうはこれか、ぽち。

…うふふ、かんたん（はあと）

いや、ほら、人前のこういう着脱をしたらまずいかもしれないから、普通の着脱方法を調べておく必要はあると思うんだ。

…

…べ、別にメニューがあるのを忘れていたのが悔しくって言うてるわけじゃないんだからね！

一人ツンデレで恥ずかしさを紛らわせてどうする。

俺は、朝飯を食べに行くことにした。

／＊／

朝食は、オレンジジュースっぽい果物の絞り汁に、牛乳っぽい何かの動物の乳に、謎の野菜たちを盛り付けたサラダ、ハムエッグ、パンをスライスしてトースト、といったラインナップだった。卵を産んだのは鶏っぽいけど鶏ではない鳥で、パンの原材料の穀物も小麦と似たような別のものだった気がしなくもない。しかし、いちいち「っぽい別のもの」というのがめんどくさいので、相当品についてはこれからはそのまま　と呼ぶことにする。気にしたら負け！

ということ、けっこううまかった。

教えてもらった中庭にある井戸から水を汲んで顔も洗えたし。タオルは貸してくれた。

歯ブラシと歯磨き粉がないのがちょっとあれだが、仕方ない。

…この体って虫歯になったりするんだろうか…

この世界って風呂もないっぽいんだよなあ

体埃っぽいし、頭とかも洗いたいんだけど、どうすればいいんだろう。水浴び？

まあ、これはそこまで切迫した問題ではないので後に考えることにして、ひとここちついた俺は状況の整理をすることにした。

／＊／

まず、俺は今、俺が開発していたゲームの世界であるグラン・ロウレルとそっくりな世界にいる。

シエランド草原、ル・シエラ、青いグリフォン亭、レイチエル、これらはゲームに存在していたものとはほぼそのまま同じである。ただし、街に入るときのチェック、排泄関係など、ゲームではゲーム性のために省かれていた「現実的な細々としたこと」がしっかり存在する。

また、ゲームのNPCではありえないような多様な受け答え・表情ができることから、レイチエルをはじめとする住人達は「リアルな人間」と考えられる。

また、俺の体についても、空腹になったりトイレに行きたくなったり自然な生理現象がおこることから現実的な存在である。角に小指をぶつけたら痛い、というか痛かった。

その一方で、俺の視界にはゲームそのままのメニュー画面が表示されている。

また、ゲームで普通に使用できていた機能、インベントリや装備着脱などがそのまま使えている。

この機能が、この世界の人間にも使えるのかは今のところ未確認である。

(こんなことができますか、って聞くわけにもいかないしな)

また、この体も元々の俺自身のものとは大きく異なる。

人種もこの世界のものだし、体格も違う。

顔立ちも、水に映ったものを見た限りでは違うようだった。

職業や技能にいたっては元々のゲームで身に付けたものである。

つまり、器は違うが、意識は俺、という状況だ。

さて、そして、この世界に来ることになった原因であるが、記憶を辿ってみると、ベータリリースサーバで動かされていたアルファ版グラン・ロウレル、そこにログインして、大魔術師ミィ・トゥール

が魔法をおこなっているところに居合わせてしまったため、のようである。

（大魔術師ミイ・トゥールね…）

俺は、グランドデザイナー剣氏と、CGモデラー兼デザイナーの女性社員との会話を思い出した。

『このミイ・トゥールってキャラクター、剣さんに似てますよねー』

『似てるっていうか、それ僕だから。もっと似せてあげて』

『えーまじっすかw』

自分の作品に、自分をキャラクターとして登場させるってのは、ありがちな話ではある。

普通は、脇役だったりするわけだが。

大魔術師も確かに脇役ではあるのだが、シナリオ上非常に重要な役柄である。

大胆だな、とその時は思ったただけだったが…

大魔術師ミイ・トゥール、別名「剣の魔術師」。

稀代の魔術師で、勇者の友。

気が遠くなる年月を生きてきたと言われ、世界の危機には勇者を伴って現れる。

その二つ名は、通常の杖ではなく巨大な剣を魔具として使用することからついた。

なぜ、その剣を携えることになったのかは語られていない。

前回の世界の危機、魔王との戦いで、封印には成功したものの勇者とともに姿を消した。

生き残ったパーティのメンバによれば、魔王が開けた穴に吸い込まれてしまったらしい。



以来行方知れずであったが、魔王の封印の弱まりを警告し、今度こそ封印を確実にするために帰還してきた。  
正式な名前はアラなんたらかんたら・ミイ・トゥールといるらしいが、くそ長いためミイ・トゥールとだけ、呼ばれている。

こんな設定だった気がする。よく覚えてるな俺。

「剣の魔術師」から「剣」<sup>剣</sup>、ミイ・トゥールから「充」<sup>み</sup>？

…まあ、なんて厨二病ちつく。

しかし、当日の前後関係から考えても、剣氏が大魔術師ミイ・トゥールということの間違いないだろう。

おそらく、魔王によって我々の世界に吹き飛ばされていたが、アルファ版グラン・ロウレル経由で帰還を果たした、ということなんだろう。

そして、俺は、その帰還に巻き込まれてしまった、ということか。

いや、俺だけじゃない、と思いつく。

山口千鳥、彼女のキャラクターもあの場にいたな、と。

ただ、彼女は状況を理解していたようなので、巻き込まれたというわけでもないのかもしれない。

ともあれ、元の世界に戻るには、原因である大魔術師「剣氏」を捕まえるのが必要なようだ。

この世界に連れてきた人物なら、帰すこともできるはずだ。

…多分きつと。

問題は、どうやって捕まえるか、だ。

彼が住居としている大魔術師の塔は、西の最果て、西の海に浮かぶ孤島にある。

通常的手段で辿りつくのは困難である。

ゲームではいくつかのクエストをクリアすると訪問できるようになるのだが、初期状態からじゃ何年かかるかわかったもんじゃない。

ゲームでは開発者無双、デバッグモードで反則技的な移動をしたわけだが…ん？

デバッグモード？

あれってもしかして、ここでも使えるのん？

俺は、興奮した。

あれが使えるとしたら、俺ってテラチート！

震える手で、慣れた動きを再現する。

おおおおお、デバッグモード出たああああ

その素っ気ない画面がポップしたのを見て、俺は狂喜乱舞したのだった。

／＊／

デバッグモードは色々な用途に使われるが、ひとつの使い方としてレベルや能力値を好きな数値に設定できるというものがある。

まあ、これはあるクエストのテストがしたい、というときにその必要レベルや能力値に合わせたり、ある技能のテストがしたい、というときにその習得レベルまで上げる、といった目的のためであって、全能力値MAXにして俺つええええ、とするためでは決してない。

第一そんなキャラクターがプレイヤーにいたら、バランス崩壊も甚だしく、白けてしまう。

本人もやっけて面白くないと思うのだが、どうなんだろうか。

もちろんゲームならば、だ。

しかし、現実でそれができると言うのならそれは魅力だ。  
イケメンどころの話ではない。

ビバ！ヒーロー！

最強、モテモテのウハウハ！

ハーレムだって夢じゃない！

…かもしれない。

実際にハーレムなんか作った日には、心労で倒れそうな気もするが、やはりそこは男の子。

ときめいたりしちゃったりするわけですよ。

そのときめきを胸に能力値をクリックした俺は、そこで固まった。

…あれ、これどうやって変えればいいの？

ゲーム上では、数値をクリックして反転させたあと、キーボードから任意の数値を打ち込むことで変えることができた。

しかし、今、ここにキーボードなどというものはない。

使えるのは、声、そして、手振りのみである。

…念じれば変わったりしたりしないかな？

と、念じてみたが、ダメだった。

がっかり…

数分前に大きく膨らんだ男の子の夢は、あっという間にしぼんでしまった。

俺は泣いた。男泣きに泣いた。

我泣きぬれて蟹とたわむる

…蟹じゃなく枕だけどな。

うじうじと枕をいじっていると、掃除のおばちゃんがやってきて、部屋を追い出されてしまった。ベッドメイキングするんだと。

俺は煮詰まった気分を切替えるためにも、街に出てみることにした。

Module 14 ・現状の整理（後書き）

チート最強になかなかない主人公^^;

## Module 15・ル・シエラ散策(前書き)

3000文字弱ですが、キリがいいので投下。

## Module 15・ル・シエラ散策

あれこれ部屋で考えていたら、いつの間にか昼になっていたらしい。そら確かに、掃除できなくておばちゃんも困るわ。

ベッドメイキングをさせると部屋を追い出された俺は、昼飯の調達も兼ねて、ル・シエラの街へ出た。

青いグリフォン亭は朝と夜はご飯付だが、昼は特にないようで、酒場兼食堂も閉まっていた。

今日の天気は晴れ。

記憶によれば確か、この地域には乾季と雨季があったはずだ。今の時期は乾季のようだった。

雨期には、夕方にスコールが降る。

今が雨季だったら昨日はひどい目にあっただかもしれない。ともあれ、少し埃っぽい乾いた空気は不快ではない。

少し歩いて、大通りに出る。

この大通りは、南北を結ぶ街道「黄金の道」の一部でもある。

「黄金の道」というのは、北方を中心にかつて栄えた帝国のとある皇帝が、南にあるという黄金を求めて北から南まで石畳の街道を大胆に通じたことからついた名前である。

かつての帝国は滅びたが、「黄金の道」は今もなお使われている。そんな設定を読んだ覚えがある。

その街道が、ル・シエラを貫いている。

というよりは、街道を囲むように宿場街が発展して今の形になった、というのが正解。

南から北、北から南、それぞれに向かう旅人の補給基地であり、北

からの品物と南からの品物が交換される商業都市でもある。  
毎月中旬には大規模な市も立つ。

それゆえ、今も人通りは多く、露店や屋台が並ぶ広場はごった返していた。

「安いよ安いよー」

「奥さん、今日の料理に採れたてのガジエはどうだい！」

「旦那、たまには奥さんにアクセサリーのプレゼントはいかが？

安くしとくよ〜」

客引きの声はどの世界どの国でも一緒なようだ。  
食べ物の屋台からはいい匂いが流れてきている。

「これはなんだい？」

俺はその1つに近づくと、並んだ商品を指差して聞いた。

店のおやじが、油の鍋から揚げたものを網ですくい上げながら答える。

「マムールでさあ、旦那」

そういう食べ物らしいが、名前を聞いても良くわからない。

見た感じは、丸いパンに切れ目を入れて、そこへ揚げた何かと葉物の野菜とトマトっぽい野菜のスライスと一緒に挟み込んでタレをかけたものようだ。

つまり、揚げものを挟んだハンバーガーみたいな感じ？

「その揚げたのは魚？」

「クウガの肉だね」



うん、やっぱりよくわからない。  
鳥か獣みたいだ。もしかしたら蛙かもしれないが。  
まあ、食べて死ぬようなことはないだろう。

「いくら？」

「ひとつ、3ガルーになりやす」

「一個くれ」

「まいどありー」

大きな笹の葉っぱみたいなものに包んで渡してくれる。

揚げたてのクウガの肉とやらはジューシーで、濃い目のタレとの相性もよく、うまかった。

ご飯がおいしいってのは幸せだね。

立ち食いしながら、異郷の街並みと人種が入り混じって賑やかな人の流れを眺める。

エキゾチックで魅力的な風景。

いつでも帰れる状況なら、観光旅行として楽しめたかもしれないかった。

もし帰れなかったら…

そんな不安が胸をよぎる。

（姉ちゃん…）

家族も、友達も、仕事も、27年間積み重ねてきたものの全てが、あちらの世界にある。

( 帰りたいなあ )

噛みしめたパンはさっきより塩っぱかった。

/\* /

手に残った葉っぱの捨て場所を店のおやじに聞いたら、横の箱を指差されたのでそこに捨てた。

そういえば、この世界には紙は普及してなかったな。

何かを記録するにも羊皮紙か木簡を使うしかないんだっけ。

ふむ。

膏張って不便だなあ、

と思ったが、インベントリがあるから俺にとってはそうでもないか、  
と思い直した。

色々と記録しておきたいものもあるから、と、俺は筆記用具を探す  
ことにした。

( 探すと言ってもどこから始めたものかな )

俺の持っている情報はあまり多くない。

シテイマップにある情報は、ゲームの冒険者用のもので生活のため  
のものではない。

冒険者ギルドに、鍛冶屋に、防具屋に、道具屋。

あ、地の女神の神殿というのものもある。

ゲームでは、パーティが全滅しない限り、連れて帰ってくればここ  
で復活させてくれる。

この世界ではそのあたりはどうなっているのか。

…個人的にはあまり確認したくない。

(道具屋からあたってみるかな)

魔術師系職業でスクロール作成ができたので、その材料になる羊皮紙が売られているだろう。

なければ、そこでどこに売ってるか聞けばいい。

俺は道具屋へ向かった。

/\* /

「いらつしゃいませー」

扉を開けると、としm(ry)もとい、大人の魅力な女性に出迎えられる。

彼女の名前は、マリアヌ・パドワール。

道具屋「パドワール商店」の女主人である。

なお、残念なことに(？)結婚していて、子どもが2人いる。

まあ、旦那は1年の半分は商品の仕入れなどで旅に出ているらしいが。

旦那の名前は…仕様書には書いてあった気がするが、忘れた。

南方の血が入って浅黒い肌に、艶やかに肩に流れる黒い巻き毛。

ぼんきゅっぼんなナイスボディ、赤い唇とその口元の泣きぼくろが色っぽい。

レイチエルが清纯な美少女とするなら、こちらは妖艶な熟女である。様々な嗜好を満たす配役と言えよう。

こほん。まあ、それはさておき。

「何かお探しですか？」

「何が置いてあるんですかね？」

首をかしげる彼女に商品を見せてもらう。

初級傷薬に、毒消し、などの初心者冒険用アイテム類はあったが、中級傷薬などの少しレベルが高いプレイヤー用のアイテムはなかった。

このあたりはLV10くらいまでと想定されていたので、そんなもんだろう。

その他に、ゲームでは出て来なかったちょっとした生活雑貨みたいなものも取り扱っていた。

はさみとか、ロープとか。

羊皮紙はぱつと見置いてなかったの聞いてみると、ああ、と言って奥へ取りに行ってくれた。

倉庫に置いてあったらしい。

書くためのインクと羽ペンも持ってきてくれた。

気が効く。

羊皮紙が1枚100G、インクが1瓶50G、羽ペンが1本20Gだと言う。

(えーつと換算すると、1万円に、5千円に、2千円、かあ

結構高いもんだなあ)

まあ、需要がないからそんなものかもしれない。

俺は、羊皮紙を10枚、インク1瓶、羽ペン5本、そして、それらを入れるためのナップザック(中)をひとつ買った。

ナップザック(中)は30Gだったので、しめて1180G。

ナップザック（中）を買ったのは、インベントリにその場で収納しようとして、はたとマリアンヌが見ていることに気がついたからだ。

状況がわかるまでは、変な能力は披露しない方がいい。

「お買い上げありがとうございますー」

軽く彼女へ会釈して店を出た俺は、宿へ帰ることにしたのだった。

## Module 15・ル・シエラ散策(後書き)

TRPGでロープとランタン(たいまつ)は必需品なんだけどな。  
あと、10フィートの棒…

## Module 16・フレンド(前書き)

ここまでではあげておきたかったので、あげておきます。

2700文字ほど。残り、30パート120000文字程度を想定。

## Module 16・フレンド

宿に戻ると、掃除のおばちゃんの活躍によって、部屋がすっかりきれいになっていた。

これぞプロの技？

例の壺も空になっていて、掃除してあった。

中身の行方については…考えないことにしよう。

俺は、ナツプザック（中）を肩から下ろして、中のものを取り出し、インベントリに入れようとした。

…あれ？インクが入らない。

羊皮紙は入った。

インクと羽ペンが入らない。

なぜ？

インベントリには入らないものと入るものがあるらしい。

試しに、手当たり次第に部屋にあるもの（壺を除く）を入れようとしてみて、どうもゲームでアイテムとして認識されているもの以外は入れられないようであるという結論になった。

（むむ、意外な制限が）

ゲーム内アイテム以外は、普通に持ち歩かなければならないようだ。早速ナツプザック（中）が役立つことになってしまったようだ。

まあ、入らないものはしかたない。

俺は、羽ペンを1本残して、4本をナツプザックへ入れた。



こうした「気づき」というか、色々試してみた結果をメモしておく  
うと、筆記用具を買ったのだった。  
さっそく、メモを取る。

部屋に机がなくて書きにくかったが、野外でも書くことを考えると、  
何か下敷きになるいたか何かを調達したほうがいいかもしれない。  
あと、書いた後のペン先とかを拭くものが必要かも。

そんな細々したこと検討を終えてから、考えごとを再開すること  
にした。

(ええと、どこまで考えたんだっけ)

- 1 . 元の世界へ帰還するのが最終目標
- 2 . 帰還する方法を大魔術師ならば知っていそうである
- 3 . 大魔術師を捕まえたい
- 4 . しかし、大魔術師が住んでいる場所へ行くのは困難
- 5 . 前使ったデバッグモードでの移動は使えない

このくらいか。

(あと、今そこにいるとも限らないんだよな)

少し、考え方を変えてみよう。

- 6 . 最後に見たとき大魔術師は千鳥のキャラと一緒にいた
- 7 . 千鳥は事情を知っていそう、今も大魔術師といる可能性が高い

たとえ今は一緒にいないとしても、大魔術師の居場所を知っている  
かもしれない。

何にしる、千鳥のキャラに連絡を取るのが妥当だろう。

…どっやって？

俺は再び自分の真っ白なフレンドリストに涙した。

フレンド申請するには、その相手のキャラクター情報を開く必要があるのだが、そのためには、同じマップエリアにいるか、検索で探す必要がある。

検索で探すには文字入力が必要だが、キーボードがない。

うーんうーんとひとしきり唸る俺。

何か他に手段はなかったか…

キャラクターの情報を見る、見る…

名前が表示されていてリンクがある情報…

…あ！

俺は、ひとつの可能性を思い出して、チャットログウィンドウを出した。

ダイレクトメッセージのタブをクリックする。

あああ、あつたあ！

そう、あの時、千鳥のキャラクターからダイレクトメッセージが飛んできた。

そのログがまだここに残っていた。

ミスティ・バード： タク・ヨッシーって、もしかして吉田さん？

タク・ヨッシー： そうだよ。君は？

ミスティ・バード： 山口ですー。吉田さん、こんなところで何

してるんですかー？

タク・ヨツシー： えーっと、これは何してるの？

俺は、感涙にむせびながら、「ミステイ・バード」という名前をクリックした。

「ミステイ・バード」のキャラクター画面が表示され、名前の横に「フレンド申請」のボタンが並んでいるのを確認する。

何もためらうことはない。俺は即座に申請した。

申請が承認されるまでどれくらいかかるのか、そもそも承認してくれるのかとか、その前に通じているのかとか、色々考えられる問題はあったが、それらの心配はすぐに解消された。フレンド承認されたメッセージが来たのだ。

うおー！！！！

思わず喜びの舞を踊る。

…落ち着け、俺。

フレンド承認されてしまえば、できることがぐっと増える。まあ、まず現状確認だな。

チャットウィンドウを再び開き、音声ボタンをオンにする。

「もしもし、山口さん、聞こえるー？」

しばらく、間が空いた。

『はいはいはい。山口です。吉田さんですかー？』

うむ、明瞭に聞こえる。携帯電話みたいだ。電話はないけど。

「うん、そうだよ。今、どこにいるの？」

『えーっと、ロウランディア王国の王宮ですね』

ほう。

ロウランディア王国は、西方にある大国で、かつて、魔王が世界を滅ぼそうとしたときに、これを封印した勇者が建国した国である。魔王と戦うために助力してくれた地の女神ロウレルに感謝して、その名が国名の一部となっている。

地の女神信仰はこの大陸で広く見られるが、この国では特に篤く祭られており、その神殿の力は強い。

度重なる魔王軍の侵攻に対しては、国々をまとめる中心的な役割を果たしてきた。

よって、魔王の覚醒を阻止するためのストーリーシナリオ「大魔術師の帰還」以降は、この国が主要な舞台となっていく。

その王宮を、勇者と大魔術師が訪問、ねえ…

『吉田さんは今、どこなんですか？』

「ル・シエラだね」

『えw なんてそんなところにw』

「なんでだろうねw」

多分最後にセーブしたのがシエランド草原だったから、ということだろうが、事情を説明するようなことでもない。

「剣さん、一緒にいるの？」

そう、これが大事。

『あ、ええ、さっきまで一緒に。』

今は王様と話があるからと、ひとりで謁見されてます』

やはり同行しているようだ。

ていうか「剣さん」でそのまま通じるのな。

ミイ・トウル＝剣氏確定、と。

「俺、そっちに合流したいんだけど、

フレンドで飛んでって大丈夫か、剣さんに確認してくれる？」

そこらへんの野っぱらや、大魔術師の塔なら、今飛んでつても良かっただろうが、大国の王宮だとさすがにまずいかもれない、と気を使ってみる俺。

『あ、はい。わかりました。』

ただ、この後会食があると言われてたので、しばらくかかるかも』

「わかった。俺も飯食ってくるからさ。」

夜遅くなってもいいから、折り返し連絡してよ」

『はい』

音声チャットを切って夕食へ。

今日の料理は、ポークピカタっぽい肉に衣をつけたソテーに、ピリツと辛い香辛料の効いたスープ、いつものパン、というものだった。これもなかなかいける。

これで、ここの料理も食べ納めかと思うと感慨深いものがある。  
食堂兼酒場の料理人さん、ごちそうさまでした。

／＊／

折り返しの返事が来たのは、夜も更けた深夜であった。

『用意しておきますから明日の朝に来てください、とのことですよ』  
「了解。直前になったらまた通話入れるわ」

そして、翌朝、俺は宿を引き払うと「ミステイ・バード」の元へ飛んだのだった。

## Module 17・再会

飛んで出た先は：普通の小部屋だった。

6畳間くらの白壁の板間で、カーテンのかかった窓に、質素な机と椅子がひと揃え。

昔テレビで見た豪華なベルサイユ宮殿の部屋みたいなところを期待していた俺は拍子抜けした。

「あれ？」

戸惑う俺。

千鳥ことミスティ・バードと一緒に待ち受けていた、剣氏こと大魔術師ミイ・トウルが首を傾げる。

「何か？」

「あ、いや、ロウランディアの王宮に出るものかと」

「ああ。あそこは昨晚会食の後すぐに失礼してきました。

ここは、王都にある私の持ち家のひとつです」

ひとつってことはいくつもあるんだ。細かいことが気になる俺。

まあ、ともかく座って話をしましょう、と促されて、俺は着席した。千鳥＝ミスティが机の上のポットから、並べられたカップにお茶っばい何か（以下お茶）を注いでくれる。

「あ、どもども」

そのお茶をずっとすすり、何をどこから聞いたものか、と思いきぐねる。

と、大魔術師のほうから口を開いた。

「まず、吉田さんを巻き込んでしまってますみません」

その口調や声音は剣氏のものだ。

そのものなだけに外見の食い違いに違和感がある。

長いプラチナブロンドに白い肌、とがった耳。

それらは、北方人ではなく、かつていたというエルフの特徴である。額には簡素なデザインの銀色のサークレットをつけ、質素な魔術師のローブをまとったその姿は、最後に見たときのCGでのごてごてした姿と比べると随分とおとなしい。

そして、何より、見た目の年齢が、若い。

あつちでも、40代にしては若いなあという感じだったが、こつちは20代くらいにしか見えない。

なんか、俺より若くね？ずるくね？

俺は、おじさん呼ばわりされたことを思い出して、呪った。

まあ、それはさておき。

「ああ、いや、まあ、そこは……」

勝手に接続して、うっかり現場に乱入したのはこちらなんで、ともごもご言っつ。

「まあ、前もって相談しておいてもらいたかった、という気はしますが、

でもきつと、剣さんが実は異世界から来たんだ、と本気で言ったら、

ストレスでおかしくなったのか、と思ってたでしようし」



大魔術師は苦笑した。

まわりくどく話してても仕方ない、本題に入ろう。

「で、それはさておき、

ぶつちやけ、俺らは元の世界に戻るんですか？」

「俺ら」という単語に、お茶をちびちび飲んでいたミスティがぴくり、と反応する。

「結論から言えば、戻れます」

「ほづ」

緊張して握り締めていた俺の拳から力が抜ける。

「ただし…」

おっと。

「ただし？」

「場合によっては、安全とは言えないかも知れません」

「ええと、どういう意味ですか？」

質問を挟みながら聞き出したところによると、

まずひとつには、初めてのことなので断言できかねる、ということ、そして、俺らの体は魔術的に作りだされたもので、

意識というか魂みたいなものだけ連れてきて、その中につなぎ止めた状態であること、

そのため、つなぎ止めている魔術そのものであるこの体が破壊されれば、

その魂みたいなのは自分の世界に帰るだろう、  
ということだった。

「ええと、つまりこの体が死んだら元の世界に戻れるってことですか？」

「外的な要因、例えばモンスターの攻撃などで死んだ場合は、  
戻れるかもしれませんが、ショックで死ぬかもしれません。

おそらく、向うの体は眠って夢を見てるような状態になっている  
と思われるので、

受けたダメージの印象が悪影響を及ぼす可能性があります」

ああ、なんか火傷する夢を見たら、実際に火傷ができた、とかいう  
話聞いたことある。

「安全に戻る方法はないんですか？」

「転送陣を用いつつ魔術で解放するのが一番安全だと思います」

「転送陣？」

「来る時に使ったあの魔法陣のことです」

なるほど。

「今ならまだアクティブですから、ほぼ間違いなく戻れると思います  
」

ん？今ならまだ？

「今ならまだ、というと、時間が経つとまずいんですか？」

「向う側の出口がいつまで動いているかわからないので…」

ぼむ、と手を打つ。

アルファ版サーバプログラムが停止されたりするとまずいのかな？  
そうなのか、と聞くと、そうだ、と頷かれた。  
社長には簡単に、

「故郷で大変なことが起こっていて戻らなければならぬ。」

しばらくあるいはもう戻れないかもしれない。

戻らなかつたら私物は処分してもらっていい。

ただ、しばらくは、今のままにしておいてほしい。」

というような書き置きをしてきたらしい。

「しゃちよー止めないでいてー」

「じゃあ、早く戻った方がいいんですね」

「そうですね、吉田さんはすぐ戻られた方がいいと思います」

ん、俺だけ？

千鳥「ミステイは相変わらずお茶を飲みながら、我関せずという顔  
をしている。」

「ええと、山口さんは？」

「…彼女には、やってもらわないといけないことがあるので」

「ボクは帰らないよ」

千鳥「ミステイはカップを置くと、にっこり笑った。

「魔王の封印をしに行くから」

俺は頭を抱えた。

うすうす予想はしてたが、やっぱりか、というかなんというか。

「えーとですね。」

彼女を置いて俺が自分だけ帰れるわけがないでしょう？」

それを聞いて、千鳥「ミスティが口をとがらせる。

「えーなんで？」

吉田さんはボクの保護者でもなんでもないでしょー

第一、ボク成人してるしー」

「君を置いて僕だけ帰ったら、社長に顔向けができない」

「ナニソレ、意味わかんない」

すっげえ冷たい目で見られた。

俺は盛大にため息をついて、剣氏「大魔術師に向き直る。

「あのですね、俺のことは事故だと思ってますし、

剣さんが俺らに黙ってこっちの世界に戻ったつても、

さっき言ったように事情も気持ちもわかります。でもですね」

彼女については違いますよね。

「彼女を巻き込むのは筋違いですよね」

俺はけっこう怒っていた。

「だから、ボクはボクの意味でここにいるんだってば」

「君は黙ってて」

口を挟んでくる千鳥「ミスティにぴしりと言うと、彼女は膨れた。

ナニソレ、ほんと意味わかんない、とぶつぶつ言っている。

「剣さんだって、社長が彼女をご両親から預かってるってことは」

存知でしょう？

その彼女に管轄下で何かあったら、社長の責任問題なわけですよ。そして、俺は、その社長から、彼女については気をつけておいてくれと言われている」

「ボク、そんなこと頼んでないし」

うるさいな。

「じゃあ、聞くけど、君は、ご両親にこの世界に来ること、ちゃんと説明してきたの？

もしかすると命を落とすかもしれない魔王の封印の旅に出かけてくるって」

「…言うてくるわけないじゃん」

そりゃまあ、言っても何の冗談？って反応かもしれないが。

「でも、どういう状態かわからないけど、

推測では俺らゲームの途中で意識不明の状態になってるわけだよ  
ね」

言ってみて気がついたが、それってほんと大問題なんじゃね？

「君のご両親だっってどんなに心配されてるか」

千鳥「ミステイの表情がこわばった。

「…吉田さんが、ボクの、ボクの家族の何を知ってるのさ」

「そりゃ、詳しく知ってるわけじゃないけど…」

少なくとも、俺の家族はすっげえ心配してると思う、と、姉の顔が

思い浮んだ。

そこへ、剣氏「大魔術師が、まあまあ、と割って入った。

「社長には申し訳ないと思いますが、

彼女には戻ってもらおうわけにはいかないんですよ」

なぜなら、魔王の封印ができる勇者が、連れてきた彼女以外、今のこの世界には存在しないから。

と、剣氏「大魔術師は説明した。

千鳥「ミステイが、ふふん、と、どや顔をしてるのがむかつく。

「…その封印の旅というのはどのくらいかかるんですか？」

「そうですね。」

実際、魔王の覚醒までに間に合わせるとなると、

1ヶ月でぎりぎりな状況だと思っています」

「この世界での1ヶ月は、あっちの世界ではどれくらいなんですか？」

ほぼ同じくらいですよ、と、剣氏「大魔術師が言うのへ、俺は唸った。

1ヶ月も意識不明ってまずくね？

帰るべきか、いや、しかし…

「吉田さん、帰った方がいいんじゃないですかー？」

それは、売り言葉に買い言葉だったかもしれない。

「帰らねーよ」

すでに俺は、引き返せない気になっていた。

「剣さん、俺もその旅に参加します」

場に沈黙が落ちる。

最初に口を開いたのは、千鳥「ミステイだった。

「えーでも、吉田さん、レベルすごく低いですよね。

下級職の52レベルってw ワロスw」

ぬぐぐぐぐ。

いちいち挑発的な千鳥「ミステイを、剣氏「大魔術師が、まあまああとなだめる。

「僕には吉田さんの言いたいこともわかります。

だから、ごうしまししょう」

剣氏「大魔術師の提案は次のようなことだった。

魔王封印の旅に参加するには、せめて、上級職のLV50は必要である。

一方、実のところ勇者のレベルも足りないので、修行しなければならぬ。

修行期間は1週間。

その間に俺がそのレベルに到達すれば一緒に行く。

そのレベルに到達しなければ、諦めて、元の世界へ帰ってもらう。

「わかりました」

俺はその条件を飲んだ。

それが、地獄の特訓への入り口だった…

Module 17 再会（後書き）

最終行修正。



Module 18 忘れられた地下都市（前書き）

4400文字。

## Module 18 ・忘れられた地下都市

まあ、なんとというか、戦闘そのものとか1週間でLV50という意味とかを甘く見ていた俺にも反省点はあると思う。

「もう、帰った方がいいんじゃないですか？」

へたばって座りこんでいる俺に、千鳥「ミステイが冷たく声をかける。」

「…まだまだ」

「この程度でへたばってるんじゃない、この先やってけませんよー」

何回目かの応酬をしてる間もなく、視界いっぱいには次のエンカウント表示が浮かぶ。

レイスLV10、4体。

剣を支えに、よろよろと立ちあがる俺。

「軽い軽い」

その合間にも、ダブルスラッシュ 上級職アサシン由来の技能を使って、千鳥「ミステイが1体を屠る。」

通常武器では倒せない彼らアンデッドも、聖剣ヴァル・デュオ 光の属性効果のある勇者装備にかかれば普通の敵と変わらない。

「クオ・ヴァル光の神に我は願う。祝福されよ、ホーリーエンチャント聖なる剣」

剣氏「大魔術師の属性付与魔法が俺の剣にかかる。」

「こなくそおおお」

光り始めたその剣を握り直して、俺は左端のレイスに突進して行った。

ぼろを纏った乾いたミイラのような体に、剣が食い込み、しゅわわわと黒い蒸気が上がる。

「キシヤアアア」

耳障りな声を上げて、そのレイスの腕が伸びてくるのを、バックステップで避ける。

「光の神クオ・ヴァルに我は願う。敵を射抜け、ホーリアアロウ聖なる矢」

避けた俺の脇をかすめるように、青白い閃光が走って、レイスを貫いた。

ぱしゅう、という音とともにチリになって散る。

「後ろ！」

声に振り返ると右にいたレイスが、襲いかかってくるところだった。剣をあげて、それを受ける。

がきいー！

「よっつと」

動きの止まったそれを、千鳥＝ミステイの剣が後ろから貫く。ぱしゅうん。

さっきのレイスと同じく、チリとなって消えた。

「3匹げつと。しゅうりょー」

気がつくと、もう一匹も千鳥「ミステイが倒していたらしく、エンカウント表示が消えた。

／＊／

もともと、王都には王への警告ともろもろの準備のために寄つただけという彼らは、俺を加えると、すぐに当初の予定通り、修行のためめ場所へ飛んだ。

そこは「忘れられた地下都市」と呼ばれる大陸南部にある地下のダンジョンだった。

かつて栄えた帝国に滅ぼされたドワーフの都の一つで、そこを統べていた王の呪いによって、住人たちが不死者アンデッドとなり、攻めてきた兵士たちを道連れにしたと言われている。

以来、宝物を求めて忍び込んだ盗賊たちも、捕えられ不死者アンデッドとなり、やがてこの都市の記憶そのものは忘れられていった。

しかし、この都市に捕えられた者たちは、今もなおさまよっているという。

「勇者の剣は光属性なので、効率的なんです」

剣氏「大魔術師はそう説明した。また、

「少しレベルが上がったら、別の場所に移動します」

とも。

俺がおずおずと光属性の武器がないことを告げると、千鳥「ミステ

イは鼻で笑った。  
いや、そら君は勇者の最終装備フルセットというチートな状態ですよね。

聖剣、ヴァル・デュオ（光）、  
金剛の鎧、フェルシエン（地）  
疾風の長靴、トリトル（風）  
炎の盾、ルーデンス（火）  
静謐の小手、パルザム（水）  
影のマント、ゼクア（闇）

資料を見た俺ら開発者が「勇者六点セット」と呼んでいたこれらは、元々初代勇者が最終戦へ向かう時に神々より贈られたものだ。

これらは、ロウランディア王家で管理されており、代々の勇者が魔王との戦いへ向かう時に貸し与えられてきた。

前代の勇者が消えた時に、これら六点セットはいつの間にか王家の保管場所に戻っていたらしい。

「どうせ、直接行きますからね。借りてきました」

はあ、そうなんですか。

確かゲームでは、選抜イベントの勝利パーティの勇者1名に送られる特別装備だったと思いますが。

「ゲームみたいにぼんぼん勇者が生まれたりしませんからね」

ぶつぶつ言う俺へ、剣氏「大魔術師は苦笑して言った。  
そうなのか。」

対する俺は、さすがにちょっとつらいかも、と剣氏「大魔術師が用

意してくれた装備を身につけているが、比べればはるかにしょぼい。

「すみませんが、光属性のナイト用の武器は手持ちがなくて、現地で調達しましょう。」

それまでは、僕が補助します」

無理言っついてきてるのは俺なので、文句言う筋合いでないのもわかってた。

それでも、一般レベルよりは上なのだ。

ただ、実際の戦闘は予想していたより、遥かにハードだった。

着くやいなや、魔物を呼び寄せる呪文を発動させて、アンデッド溢れるダンジョンを攻略して行くという荒行は、実質初心者と言っいい俺には拷問以外の何物でもなかった。

「あれー吉田さんゾンビが怖いんですかー？」

強がりも入ってたのかも知れないが、千鳥「ミスティは、腐肉を滴らせるゾンビを顔色を変えることなく切り伏せて行った。

「こんなの、シューティングゲームのゾンビと同じじゃないですか」

いや、そんなのやったことないから…。

まず、その恐怖に慣れるまでだいぶかった。

また、体の動かし方に慣れるのもかなりかった。

「吉田さん、力を抜いて。動き方は体が知っています」

「そ、そう言われても」

もたもたと俺が振った剣を避けて、グールが襲いかかって来る。くわん、と音を立てて、ブレストプレートの胸部にグールの爪が弾かれた。

ナイス、鎧。

しかし、そのままグールの黒く曲がった鋭い爪は俺の首に伸びてくる。

そこにはカバーはない。

く、まずい。切り裂かれる！

ざしゅ。

グールが、縦に切り裂かれた。ぱしゅう、とチリになる、グール。

エンカウント表示が消え、経験値表示へ。てりりりーんといういつもの音楽とともにレベルアップ。

「また、つまらぬものを切ってしまった」

楽しそうですね、山口さん。

これが、若さというものなのだろうか…俺はがっくりと肩を落としました。

／＊／

最初の休息が取られたのは、地下10階に到達してからだった。最終階は22階、ほぼ半分まで来たことになる。

ただ、下へ行けば行くほど、敵は強くなるので、ペースは落ちる。

「この調子なら何とか、今日中にラスボスまで行けそうですね」  
やっぱり、ラスボスいるんだ。

俺は、もすもすとサンドウィッチを頬張りながら、心の中で呟いた。  
冒険者用レーションというアイテムの中身がサンドウィッチなのだ  
と、俺は初めて知った。  
竹を編んだ箱みたいなものに詰めてあった。

「ボクはもうちょっとペース上げて大丈夫だけどね」

と、千鳥「ミステイがちらりと俺を見る。  
ぐぬぬぬぬ。

特に最初のうち足を引っ張っていた感が否めない俺は、無言を貫く  
しかなかった。

「吉田さんもだいぶ慣れて来たみたいだし、少しペース上げましょ  
うかね」

連戦のおかげで、転職してファイターの上級職であるナイトLV1  
になっていた俺は、あつという間にLV8まで上がっていた。  
また、途中で調達した装備と交換して、守備力、攻撃力も多少上が  
った。

そして、剣氏「大魔術師が言うように、さすがに戦闘に慣れてきて、  
少しはまともに戦えるようになっていた。

このダンジョンの適正レベルがどれくらいだったかは覚えていない  
が、存在そのものがチートな大魔術師と、装備がチートな勇者がい



れば十分攻略可能なレベルなのだろう。

勘弁してください…というわけにもいかず、俺は渋々頷いた。

／＊／

『我が一族の宝が欲しければ、我を倒して奪うがいい…倒せればな！』

陰々と上級レイス 忘れられた地下都市の王の亡霊が、戦闘開始の台詞を告げると、ボス戦表示に切り替わった。

いや、「エンカウント」と書かれているところが「ボス戦」になっただけで、大して変わらないんだけど。

「ダブルキャスト。

地の女神ローレルに我は願う、彼らを守れ、金剛こんごうの加護。  
力を貸せ、強力じょうりきの加護」

守備力増強と攻撃力増強の支援系魔法が前衛の2人にかかる。

「雑魚お願い」

「了解」

これまでに光属性の剣も手に入れていた俺は、王を守るように襲ってくるレイス 近衛騎士たちの亡霊を、黙々と切り捨てる。

その空いた隙間を突っ切って、千鳥「ミステイ」がボスへ駆け寄る。

「まずは一発」

跳躍、そして、斜め上から袈裟切り。

ボスの攻撃、上から振り下ろす腕を、更に跳んで避ける千鳥「ミステイ。」

「次、2発目」

ボスの死角に着地して、今度は下から切り上げる。

ボスがぐおおお、と吠えた。

最強武器でのダブルスラッシュは反則だよね。

と呟きつつ、俺は、近衛騎士の亡霊が、そちらへ向かおうとするのを、後ろからざくざく切り捨てて行く。

「これで、多分最後っ」と

ボスが、向き直ったタイミングで、開いた胸元へ、千鳥「ミステイ」が突っ込んだ。

聖剣ヴァル・デュオが深々と呪われた王の胸に突き刺さる。

『おおお、呪わしや、帝国の犬ども。』

我らが一族の宝を奪う盗賊ども。

この恨みは永遠にこの地に残り、お前たちを呪い続けるだろうっ…』

ボスが崩れ落ち、残っていた近衛騎士たちも崩れて消えて行った。

「ドワーフ最後の王の剣、これは結構いいものですよ」

剣氏「大魔術師が、ボスが消えたあたりに落ちていた剣を拾って、俺に手渡してくれた。」

「なんかこー。経緯を考えると、もらいにくい感じがしますね」  
「経緯って、ああ、帝国に滅ばされたという話？」

大丈夫ですよ、と剣氏「大魔術師は肩をすくめた。

「彼らが守っていた、本当のドワーフの宝は、帝国によって奪いつくされました。

ここに残っているのは、彼らの残留思念が生み出したかつての記憶の一部ではありません。

しばらくすれば、また彼らとともに復活します」

そういうものなのか…。

「じゃあ、彼らは成仏してないんですか？」

千鳥「ミステイが、悲しそうな顔をして聞いてきた。

「成仏、というのは何かちょっと違う気もしますが、彼らの帝国への深い恨みが、魔王のそれと共鳴してしまってますからね。

魔王が滅びれば、彼らも滅びるんでしょうけど…  
…それまでは、ずっと存在し続けるんでしょうね」

なんだか、かわいそうですね。

と、千鳥「ミステイが呟くのを、俺は聞いた。

／＊／

1日目の特訓は、このラスボス戦で終了だった。

俺は弱音を吐かないようにしていたが、正直へとへとで、助かった、

と思った。

最終的に、俺はナイトLV13、千鳥〓ミステイは勇者LV18まで上がっていた。

剣氏〓大魔術師のダンジョン脱出呪文で、地下都市から離脱し、最寄りの街の冒険者の宿へ移動する。

宿の酒場兼食堂にて、夕食を食べながら、軽く明日の打ち合わせをした。

「明日は、次のダンジョンへ移動します。

朝8時集合ですから遅れないようにしてください」

この宿にモーニングコールはあるのだろうか、と考え込む俺。

「あ、あと」

剣氏〓大魔術師が、思い出したように、つけ足した。

「そこの入り口で、残り2名と合流します」

え、なにそれ。

千鳥〓ミステイを見ると、頷いている。

…知らなかったのは俺だけ？

しかし、質問するにも疲れ過ぎていたので、やめた。もうだめ、ベッドが俺を呼んでいる。

その夜、俺は夢も見ずに泥のように眠った。

## Module 18 忘れられた地下都市（後書き）

次の節では、なんと新パーティーメンバーが2名登場！  
という、前振りまでです。

Module 19 ・もつひとつの再会（前書き）

3500文字弱。このペースだとあと20パートくらいかも。

06/21 微修正

## Module 19・もつひとつの再会

翌朝、俺たちは、次の目的地へ予定通り旅立った。

あまりにも疲れていたもので、起きれるか心配だったが、緊張していたためか、朝早くに目が覚めた。

肉体的な疲労はまったく残っておらず、俺はこの体に感心した。恐るべし、ナイトLV13。

次の目的地は、闇の峡谷と呼ばれる、大陸北部から東部へ伸びる山脈の狭間にある谷だった。

かつて帝国時代ここには鉱山があり、露天横穴掘りで掘り回されたのだが、鉱脈が尽きて廃れ、そこを帝国は産業廃棄物の捨て場にしていた。

そのゴミに含まれていた特殊な要素が、魔王の誕生により活性化してモンスター化、増殖して、峡谷に網の目のように張り巡らされた坑道に溢れ返った。

以来、この峡谷はモンスターの巣となっている。

その一部はさ迷い出て周辺の街や旅人を襲うこともある。

このため、周辺の街は冒険者を雇って、定期的に討伐をしている。しかし、こここのところさ迷い出てくるモンスターは減っており、討伐もあまりされていない。

「実際は、魔王の活性化に呼応して、モンスターが活性化、強力になり、数も増えています。」

おそらくは、魔王軍の呼集に備えて力を溜めているのでしょう。」

ですから、その前に、レベル上げついでに叩いておきます。

と、剣氏「大魔術師は説明した。  
最奥にダークドラゴンという闇属性の竜が住んでおり、それがモン  
スター生産の母体となっているという。

「これを斃<sup>たお</sup>せば、しばらくは再生されないはずです」

ここのラスボスも倒してしばらくすると復活するのか…。

俺たちは、最寄りの街まで剣氏の魔法で飛び、そこから徒歩で、峡  
谷へ向かった。

／＊／

道なりに進んでいくと、山のふもとの辻に、人が2人立っていた。  
銀色のフルプレートアーマーを着こんだ大柄な、おそらく男性の騎  
士と、漆黒の皮鎧を来た、長い金髪の女性。  
その女性の方がこちらを見ると、ぶんぶん手を振った。

それへ剣氏「大魔術師が手を振り返すと、女性の顔がぱつと輝き、  
駆け寄ってきた。

「せんせえええええ」

もの凄い勢いで駆けてきて、女性が剣氏「大魔術師に抱きついた。  
千鳥「ミステイがそれを見て、目を丸くして立ちつくしている。

「先生、先生、先生、よくぞご無事で」

今度は抱きついたままわんわん泣き始めた。  
感情表現の激しい人だ…。



辻に取り残されていたフルプレートの騎士が、兜を脱ぎ、苦笑しながら、こちらへ歩み寄ってきた。

「おいおい、エリー、先生が困っておられるよ」

「う、うん…」

鼻をすすりあげながら、女性が剣氏「大魔術師から離れる。

「ご無事のご帰還、心からお喜び申し上げます」

騎士が、膝をついて、右腕を前に上げ、頭を垂れた礼を取り、言う。女性も慌てて横に座ってぺこりと頭を下げた。

「先生おかえりなさい！」

剣氏「大魔術師は、苦笑していた。

「いや、そういう堅苦しいのはいいから」

「堅苦しいのが騎士ってもんですよ」

にやりと男が笑って立ち上がった。今度は、笑いながら右手を差し出す。

剣氏「大魔術師は、ぐっとその手を握った。

「おかえりなさい」

「ただいま」

爽やかな再会の傍らで、立ち上がった女性が、千鳥「ミスティに近づき、顔を覗き込んでいた。

じいじい。

「あ、あの…何か…」

「ほんと、面影あるわぁ…」

しげしげと見まわす女性に、千鳥「ミステイの顔が赤くなる。

「ねえ、あなた、先生とレイチエルの子供か何かだったりする？」

「は、はい？」

俺は、吹いた。

／＊／

「まず、お互いに紹介しますから」

剣氏「大魔術師は、彼女を千鳥「ミステイから引き剥がすと、紹介を始めた。

「こちら、エリス・ガーランド。

前代の勇者のパーティのメンバで、魔剣士。

今のレベルは…」

「72よ」

えっへん、という感じのエリスに頷く、剣氏「大魔術師。

「で、こちらが、フィリップ・ウィナー。

同じく前代の勇者のパーティのメンバで、聖騎士。

今のレベルは…」

「71だ」

「二人ともだいぶ上がったね」

「まあ、あれからもう20年経ってますからね」

感慨深そうに言うフィリップに、剣士「大魔術師はやはり領いてみせる。」

その紹介を聞いて、俺は唸った。

魔剣士に聖騎士、リミットブレイク職きやがった。

ゲーム「グラン・ロウレル」のベータリリースに初期から実装されている職業は基本4種とそれぞれの上級4種である。

基本4種が、ファイター、マジックユーザ、クレリック、シーフ。

それぞれの上級4種が、ナイト、マジシャン、ビショップ、アサシン。

これらに加えて、現在開発中のアルファ版から本格搭載予定のリミットブレイク職と呼ばれる4種の職業、勇者、賢者、聖騎士、魔剣士がある。

このうち、勇者だけは先行して、ベータリリースの最終ストーリーシナリオの最後のクエストをクリアすれば、すべての職業から転職可能になる。

その他の3つについては、順次開示されて行く予定になっていた。はつきり言えば、ゲームではまだ開発中である。

設定的には、「人を越えた」勇者を支える存在として神に承認された職業で、初代勇者のパーティの3名がこれらの職業を賜った、とかなんとかだったと思う。

「それで、こちらは、ミステイ・バード。

新しい勇者、今LV18です」

「よろしく」「よろしく」

「よろしくお願いします！」

笑いかけてくる2人に、かちんこちんと緊張して返事をする千鳥「  
ミスティ。」

「それから…」

剣氏「大魔術師が俺に向き直ったので、俺も緊張した。」

「こちらは、タク・ヨッシー、

彼女の知り合いで、ナイトレベル13です」

「よろしく」「よろしく」

「よろしくお願いします」

同じく笑顔を向けてくる2人に会釈する。

「それで、先生、この子はレイチエルの子供なんですか？」

エリスは忘れてなかったようだ。

興味深々で目をきらきらと輝かせるエリスに、剣氏「大魔術師が苦笑して答える。」

「違います。」

彼女と似てるのはたまたまです」

「そっかー。」

先生とレイチエルの愛の逃避行の落とし胤たね、とか超期待したんだけど」

「エリス…そのゴシップ好きなところ変わりませんね」

残念そうに肩を落とすエリスに、千鳥「ミステイがおずおずと声をかける。

「あの…レイチエルって、青いグリフォン亭のレイチエルさんのことですか？」

「あれ？あの子のこと知ってるの？」

「あ、はい、駆けだしのころにお世話に」

ゲームで。

そっかーと嬉しそうなエリス。

「そっちもレイチエルなだけどさ。

さっき言ってたレイチエルは、前の勇者のことなんだわ。

先生と一緒に消えたから、手に手を取っての愛の逃避行に違いない！

って

「そんなこと思っるのはお前だけだ。エリー」

「あたっ」

フィリップが軽くエリスの頭をはたいた。

「青いグリフォン亭のレイチエルは私たちの子供でしてね。

前の勇者の名前をもらったんですよ」

おおっ。レイチエルの親御さん！

あれ、「私たち」って…？

「あの子ねーフィルに似て生真面目で」

ああ、確かに、エリス・ガーランド、と。あれ、フィリップの姓は

ウイナー？

「こちらは、結婚して同姓にする風習がなくて、子どもは基本的に母親の姓を名乗るんです」

首を傾げる俺に、剣氏「大魔術師が補足説明してくれた。

」なるほど。

俺も、レイチエルさんにはル・シエラでお世話になりました」

やーそっかー嬉しいなーとエリス。

で、話を戻しますが、と剣氏「大魔術師は咳払いした。

「この2名には、これからレベル上げをしてもらって、それぞれLV50を越えたところで、このメンバーで魔王の封印へ向かいます」

それで、エリスとフィリップの2人には、パーティとしてなじむのと同時に、ミスティとタクそれぞれの指導もして欲しい。

そう、剣氏「大魔術師が言うのへ、エリスとフィリップは頷いた。

「じゃあ、あたしはミスティがよさそうね」

「ああ、私は、タクだな」

即決で担当が決まる。

よろしくな、と差し出された手を俺は、がっしりと握った。

「よろしくお願ひします」

にやりと笑うフィリップと何かが通じ合う。

そこへ、ちょっと離れたところで挨拶し合っていたエリスと千鳥。ミスティとの会話が風に乗って流れてきた。

「ミスティちゃん、それで、あのタクって子とはどこまで進んでるの？」

「すすすす、進んだりしてません！」

「えー？」

∴ あっちは大丈夫か？

そんなこんなでドタバタしながら、新しいパーティとなった俺たちは、改めて闇の峡谷へ歩き出したのだった。

## Module 19 ・もつひとつの再会（後書き）

青いグリフォン亭のレイチエル・ガールランドは16歳。

20年前の魔王戦の後、2年後にフィルとエリーは結婚、その2年後にレイチエル誕生という感じです。



Module 20 闇の峡谷（前書き）

5000文字弱。

## Module 20 ・闇の峡谷

「少しゲームをしましょう」

剣氏「大魔術師は、峡谷の入り口でそう言い出した。

「ゲームですか？」

戸惑う俺と千鳥「ミステイに対して、エリスとフィリップは「懐かしいですね」と嬉しそうだった。

「このモンスターは、昨日の地下都市とレベルがあまり変わりませんから、

みなさんなら軽いでしょう。

ですから、2チームに分けて、競争します」

競争！？

「チーム分けですが、

エリスとミステイがAチーム、フィリップとタクがBチームとします。

それで、競争内容ですが…」

ちよつと言葉を切り、俺たちを見回す。

「今日は、早さを競いましょうか。

最奥のボスがいる間の前まで、早く着いた方が勝ちです。

Aチームの開始場所はあそこ、Bチームの開始場所はあそこです」

指差す方向を見ると、山肌に口を開けているそれぞれ別々の坑道の入り口が見えた。

「ルートはそれぞれ、エリスとフィリップが知っているはずですよ  
「だいたい昔だからなあ」

エリスが頭を掻く。

「俺は覚えてるぞ。この勝負もらったな」

えーっと言うエリスに、千鳥「ミステイがおずおずと手を上げる。

「あ、あの私、ここ前に来たことある気がするのでわかるかも」

ぬ、思わぬ伏兵が。

「おー、頼りになるー」

キヤツキヤと喜ぶエリス。

「あの、勘違いだったらごめんなさい……」

「さて、何か質問はありませんか？」

ないなら始めますよ？という剣氏「大魔術師へ、エリスがはいはい  
はーいと手を上げた。

「エリス君、なんででしょう？」

「競争に勝った方に何か賞品はないんですかー」

「賞品ですか？」

勝ったチームがボスの財宝総取り、とか？」

「あんま、嬉しくないなあ」

「じゃあ、何が欲しいんですか」

「えーっとえーっと。」

あつ先生の恋バナが聞きた…あたっ

フィリップの裏拳がエリスに飛んだ。

「そんなのが聞きたいのはおまえだけだ」

「…私もちよつと聞いてみたい、かも…」

ぼそり、と千鳥「ミステイが呟くと、エリスの顔が輝いた。

「恋バナ！恋バナ！」

「あーじゃあ、こうしましょう。」

負けたチームが、恋バナを話す、ってことで

いや、ちよつと待て。

「んー、フィルの恋バナ聞いてもなあ

タクくんには興味あるけどー」

「ちよ、ちよつと、やめてくださいよ」

いや、山口君、君も微妙に聞きたそうにしてるのはなんなのか。

「俺も、お前の恋バナ聞いてもしょうがないんだが…」

「あら、私が負けるわけないじゃないーい」

「ほほっ。」

じゃあ、俺が勝ったら、お前の恥ずかしい失敗話を披露するとい  
うのでどうだ」

「えー」

発散して行く会話を、剣氏「大魔術師が締めた。

「では、Aチームが勝ったらタク君の恋バナ。

Bチームが勝ったら、エリス君の恥ずかしい話。

ということでもいいかな」

「いやいやいや、やめましょうよ」俺、

「むー、まいつか」エリス、

「いいですよ」フィリップ、

「それをお願いします…」千鳥「ミステイ。

…多数決で決まってしまった…。

「では、開始しましょう。

僕は先にゴールで待ってますから早く来てくださいね」

剣氏「大魔術師は、そう言って歩き出そうとして、ふと足を止めた。

「あ、忘れてました」

言いながら、俺たちに、モンスターを呼び寄せるための魔法をかける。

「せっかくの稼ぎ時ですからね、これをかけておかないと。

じゃ、頑張ってくださいね」

今度こそ、ひらひらと手を振ると、単身坑道へ消えて行った。

鬼！悪魔！

「じゃあ、おっ先にー」

エリスと千鳥「ミステイが、さっさと自分たちのスタート地点へと向かう。」

「俺たちも行きましょうか」

促すフィリップに俺は頷いた。

／＊／

「タクくんは、ナイト　　騎士のパーティでの役割は知ってるかな」

入口に向かいながら、フィリップが聞いてくるのへ俺は考え込んだ。

「すみません、あんまり考えたことなくて…」

「いやいや、いいよ。」

騎士つてのは、守備力・耐久力がもつとも高く、打撃力も比較的高い前衛向きの職業ということは知ってるよね」

「はい」

うんうん、とにこやかなフィリップ。

「それに比べて、他の職業は守備力・耐久力が弱い。

魔法使い系なんて装備は紙みたいなもんだ。

僧侶系、盗賊系も低めだし、勇者だつてそんなに高くない。

しかし、彼らは火力が高かったり、支援魔法を使えたり、特殊なスキルを持ってたりする。」

俺ら騎士は、彼らを守る『壁』なんだよ

「壁、ですか…」

繰り返す俺へ、フィリップが頷く。

「そう、俺らの役目は頑強な壁であること。

敵からの攻撃を受けて耐え、近づいてくる雑魚を倒し、

仲間が敵の攻撃を受けないようにして、彼らの攻撃のための時間と機会を稼ぐ」

「なるほど」

じゃあ、成長するときは耐久に振った方がいいんですね。

と言うと、フィリップは朗らかに笑った。

「そうだね。

もちろん、攻撃力や速度も大事だけど、硬いってことが最優先だね」

「わかりました」

俺が頷くのへ、じゃあ、とフィリップが続ける。

「今日は、俺が他の仲間役として後衛に入ろう。

君には前衛で実際に動いてもらって、

それを見て俺がナイトの動きについてアドバイスするよ」

「はい、よろしく願います」

俺が頭を下げると、フィリップはにっこり笑った。

そして、入口に着くやいなや、装備を外し始める。

「動きが遅いと意味がないからね」

フルプレートから、軽装の法衣のようなものへ着替えた。  
さすがに手際がいい。

「俺は、ビシヨップからの転職組でね。

実は、人種的にもどっちかという頭脳労働向けで、壁には向いてなかったりするんだ」

そう言えば、フィリップは北方人で、体格もマッチョというより細マッチョくらいである。

「ナイトは、成長すれば、同レベルの聖騎士より守備力は高くなるし、

君は耐久力が高い南方系だから、正直助かるよ」

サークレットを嵌めながら、にこにこするフィリップに俺は口ごもった。

「そうなんですか。

俺、みんなの中で、足手纏いかと思ってたんで、そう言ってもらえると、嬉しいですよ」

「先生、あー見えてもシビアだから、モノにならないと思ってたら、そもそも連れて来ないと思うぜ」

俺も、頑張って指導するからがんばろうぜ！

と指を立てるフィリップに、俺もぐっと指を立ててみせた。

「おう！」

ちなみに、脱いだフルプレートはどうするんだろう、と見ていたら、



バックパックに詰めていた。  
どうやら、四次元ポケットみたいな魔法の道具らしい。

「昔見つけた宝物のひとつだね。なかなかないんだぜ、これ」

やっぱり、俺のインベントリは特殊なようだ。

仕組みとしては似てるのか？

「じゃ、ちよつと出遅れたけど行きますか」

すでに、Aチームのエリスらの姿はない。

彼らに遅れること数分後、俺らは坑道へと踏み込んだ。

／＊／

吸血コウモリLV10×10匹が、襲いかかってくる。

俺は、盾をかざして、こいつらの攻撃を受けた。

守備力が高いため、かすり傷ひとつ受けない。

攻撃が失敗し、キーっと舞い上がるコウモリたち。

そこへ、フィリップの詠唱が響く。

「クオ・ヴァル光の神に我は願う、ライトウィルフル聖滅せよ、光の渦」

渦巻くような光が、コウモリたちを包み、焼いた。

吸血コウモリも不死属性のため、光系の呪文に弱い。

ぱたぱたとコウモリたちが地に落ち、黒い煙となって消えた。

持ちこたえた数匹のコウモリも、俺の剣と、フィリップの魔法で一掃した。

「ナイス、防御」  
「ナイス、呪文」

親指を立て合う俺たち。

戦闘を繰り返すうち、フィリップとの連携にもだいぶ慣れてきた。

「じゃあ、次は挑発の技能スキルを使ってみようか。

これを使うと、雑魚を効果的に引き寄せることができる」

「了解！」

そんな細々としたTIPSをひとつひとつ教わりながら、俺たちは順調に地下へと下って行った。

／＊／

「で、結局先に着いたのは…」

「君たちみたいですねえ」

ラスボスの間へ続く道の、ちょっとした広場みたいになっている場所に、剣氏〓大魔術師が立っていた。

フィリップの記憶は正確で、俺たちがほとんど迷わなかったのは確かだ。

しかし、千鳥〓ミスティが、訪問したことがあるなら、マップの記録があるはず…

「うっわぁ

負けたー！」

そこへ丁度、エリスたちが駆け込んできた。

最後、走ってきたらしく、息を切らせている。  
まあ、俺たちも走ったけど。

「ボクの案内が悪くてごめんなさい」

「いやいやいや、君は悪くない。」

悪いのは、あのキャリオンクローラー」

しよぼんとする千鳥「ミステイのフォローなのか、エリスがおのれ  
虫ども、と拳を握りしめる。

「…なんだそれは」

「こつ、キャリオンクローラーがうじゃあつと」

「そんな低レベルモンスター、お前なら瞬殺だろう」

「うつつうつつ、虫嫌いなよう」

話を聞くに、途中でキャリオンクローラーに埋め尽くされた道があ  
つて、迂回してきたらしい。

「遠隔から呪文で焼けよ」

「臭いもん」

口をとがらせるエリス。あなたいくつですか…。

「まあ、負けは負けだ。」

「恥ずかしい話、忘れるなよ」

「ち、わかったわよ」

恋バナを逃れられた俺は、ほっと胸を撫で下ろした。

「じゃ、ラスボス行きますか」

決着がついたところで、剣氏「大魔術師が切り出す。

「あ、俺、前衛入りますから、装備変えてきますね」

と、フィリップが手を上げた。騎士装備に戻すらしい。  
剣氏「大魔術師が頷くと、物陰へ着替えに行った。

「あら、あの人、若い子に気を使っちゃって」

「う、ごめんなさい」

なぜか、謝るミスティ。

フィリップは紳士だなあ。さすが騎士？

「私には気なんて使わないのにね」

けらけらとエリスが笑った。

なるほど。まあ、夫婦ならそんなもんじゃ、とも思うが。

「あ、少し聞きたいことがあるんですが」

間が空いたので、俺はちょっと疑問に思っていたことを剣氏「大魔術師に聞いてみた。

「どつぞ」

「ラスボスを倒しても、しばらくすると復活するようなんですが、どれくらいで復活するんですか？」

「そうだね…」

「ここだと、旧帝国領に近いから、今だと1ヶ月くらいかな」  
ん？

「…場所とか、時期とかで期間に違いがあるんですか？」  
「うん、魔王に近ければ近いほど、魔王が覚醒していればいるほど、再生の期間が短くなる」

なんと。

「えーっと、魔王が完全覚醒すると、  
例えば、ここラスボスだと、どれくらいで復活するんですか？」  
「1週間くらいかな？」

むうむう。

「なるほど、魔王が復活するとやばそうですね」  
「その他にもねー」  
魔王の配下の四天王が復活して来て、  
魔王軍として組織化されたりして大変なのよー」

エリスが補足するように説明を加えてくれる。  
ああ、なんか四天王って資料で見た覚えがある。

「あ、魔軍四天王、懐かしい…」

千鳥「ミスティが呟いた。  
ナニソレ、と聞こうかと思った丁度その時、フィリップが戻ってきた。

「お待たせしました」

「…ええ、魔王が復活すると、色々とひどいことになります。じゃ、まずは、ここのラスボスを潰しますか」

俺たちは、ラスボスの間に踏み込んだ。

瘴気を纏った巨大な、黒い竜　　ダークドラゴンが、首をもたげ、こちらを見る。

そして、その周りから、瘴気の塊のようなシャドウドラゴンがいくつも立ちあがってくる。

『ワラワの寝所へ入りこむとは、命が惜しくない虫けらどもめ。ワラワの子らの眠りを乱した罪、その身をもって償うが良い』

ラスボスの口上とともに、ボス戦が開始された。

／＊／

一部メンバ修行中とはいえ、対魔王戦チームの敵ではなく、ダークドラゴン+ は2ターンで没した。

俺は、だいぶ動きが良くなったと剣氏「大魔術師に褒められて、ちよっと照れた。

「先生が良かったからですよ」

「いやいや、生徒がいいからだろう。」

確かに戦闘慣れはしてないが、呑みこみがいい」

謙譲し合うフィリップと俺に、割り込んでくるエリス。

「あ、私も、ちゃんとアサシンの必殺技教えたんだから」

「…お前は勇者に何を教えてるんだ」

いや、実際、千鳥「ミステイ」はアサシンからの転職組だったので、  
技術的な相性は良かったらしいが。

その後、昼食を挟んで、再び2チームで掃討戦をしてその日は暮れ  
た。

本日の成長：

俺「タク・ヨッシー、ナイト、LV13、LV23、10LVアッ  
プ。

千鳥「ミステイ・バード、勇者、LV18、LV25、7LVアッ  
プ。

## Module 21 和解（前書き）

大変お待たせしました。

手さぐりで書いてますので、色々不備あるかと思いますがご勘弁を  
と、エクスキューズしながら、投下してみます。

次をどこまで書くかちょっと悩み中なのですが、あまり間を空けな  
いようにはしたいと思います。



## Module 21 和解

その日の夜は、峡谷から少し離れた位置にある林で野営をすることになった。

「これから、人里を離れることも増えますから、慣れていくためにも」

ということらしい。

慣れているのだろうエリスとフィリップは、野営予定地に来るなり、地ならしを始め、  
てきばきとかまどらしきものを作り始めた。

「ミスティ君とタク君は、炊きつけ用の枝を集めてきてもらえますか？」

戸惑う俺とミスティ「千鳥に、剣氏」大魔術師はやんわりとほほ笑みながらそう言った。

「枝、ですか」

反射的に聞き返す、俺。

「かまどは作っておきますから、乾燥したものをなるべく多めに、  
…わかりますか？」

「昔ボーイスカウトに参加したことはあるんで、なんとなくは」

求められてるものはわかる。

ただ…ちらりとミスティ「千鳥を見ると、こわばった顔をしていた。

「お願いします」

そんな俺たちの様子を見ていた剣氏「大魔術師の笑みが深くなる。ああこれは、お前どうにかしてこい、と、そういうことですね。」

「…わかりました」

俺は頷くと、行こう、とミスティ「千鳥に声をかけた。

／＊／

「山口さん、キャンプの経験はある？」

雑木林の中を歩きながら、俺は努めて明るい声で、聞いてみた。とぼとぼとうつむいて歩いていたミスティ「千鳥が黙って首を振る。

「そっか。」

「じゃあ、地面に落ちてるこのくらいの大きさの乾燥した枝を拾ってくれるかな」

例を示すために、足元から枝を拾って見せた。

ミスティ「千鳥が顔を上げて、それを見て、頷く。

その顔は相変わらずこわばっている。

うつむ、気まずいなあ…

「今日使う分くらいでいいと思うから、あまり遠くには行かないで、この辺でざっと拾って集めよう」

「…わかりました」

ぼつり、と言うと拾い始めた。

実際、千鳥＝ミスティとこういう風に2人きりになったのは、こちらに来てから初めてである。

合流後の口論から、その翌日は気が立ってる様子で声をかけるのも憚られ、

それは、俺が力尽きていたせいもあるのだが、さらのその次の日の今日は新メンバーの合流などで、まともに話す機会がなかった。

こういう風に2人の時間を作ってくれたのは、剣氏の配慮なのだろうけれど…

(ぶつちやけ、どうしたものか)

どうにも、若い女性相手と思うと、気が引けてしまう。

中学・高専・大学と男だらけの環境で、

年頃の女性と仕事以上の会話をしたことなど、自慢じゃないがほとんどない。

うむ、本当に自慢にならない…

(ここは、やはりあれか、まずはごめんなさいして機嫌を直してもらうしか…)

「…あの」

「あひゃあ…!」

ぐるぐるしているところへ声を掛けられたものだから、裏返ったすっとんきょうな声が出してしまった。

「…ええと？」

相手も戸惑ってるじゃないか、とほほだ。

「ああ、いや、ごめん。ちょっと考え事してたもんだから。何かあった？」

取り繕うように言うと、ミスティ「千鳥が両手に抱えた枝の束を見せた。

「これくらいでいいですか？」

「おお、すごい集めたね」

褒めると、かすかに笑顔が浮かんだ。

かくいう俺も、考えてる間に無意識に集めていたらしく、結構な量を抱え込んでいた。

「えっと、じゃあ、ぼちぼち戻ろうか…」

と、その前に…

俺が覚悟を決めた瞬間、先に動いたのは、しかし、ミスティ「千鳥の方だった。

「あの、吉田さん、昨日は…ごめんなさい。色々失礼なこと言っちゃって」

ぺこりと、頭を下げてくるミスティ「千鳥。

うあああ、先に謝られたあああ！

動揺を押し隠しつつ、何とか口を開く。

「あ、いや、俺も悪かったよ。頭ごなしに言いすぎた…」

わたわたしつつも、便乗して謝ることができた。

その様子を見て、ミステイ<sup>II</sup>千鳥が困ったように笑い、俺も、頭をかいて笑った。

少し雰囲気が緩んだところで、俺はもう少し歩み寄ってみることにした。

「帰る前に、少し、休んでいかない？」

促して、その辺の出っ張りに各々腰を下ろす。

自動販売機でもあれば、ちょっとした飲み物でも買って場を繋げるんだけど、

ポーション出すのも変だしな、などと、インベントリの中身を思い浮かべて首を振る。

「そう言えば、剣さんから、これもらってたんですが、いかがですか？」

ミステイが腰につけた小袋から、赤い果物のようなものを2つ取り出して、

ひとつを俺に差し出した。

あー、なんだろう、俺いいとこない？

まあ結局のところ、剣氏が気配りさんなんだろうっけどな。

「ありがとう。いただくよ」

バツの悪い思いは押し殺して、  
手のひらの半分くらいの大きさの硬いその果物を受け取り、齧って  
みる。

すっばいリンゴのような味がした。

「山口さんはさ、なんでこの世界に残って戦おうと思ったの？」

なるべく、優しく聞こえるように口調に気をつけながら言ってみた  
が、

「ミステイ＝千鳥は戸惑ったようだった。」

「…それは…」

「ミステイ＝千鳥は、うーん、としばらく考えた後、ぽつぽつと話し  
始めた。」

「グラン・ロウレルの前身のゲームって、ご存知ですか？」

「ああ、20年くらい前の、ネットゲームってやつだろ？」

「ミステイ＝千鳥が、ええ、と頷きつつ、言葉を継ぐ。」

「それが、オフライン版でリメイクされたことは知ってます？」

「え、それは知らない」

ネットゲームが出た10年後くらい、PCが普及し始めた時期に、  
パッケージソフトとしてリメイクされていたらしい。

「ボク、それをやったんですよね」

「へえ」

10年前くらいというと、彼女は小学校高学年くらいか。頷いて先を促す。

「…ご存知かも知れませんが、」

うちの母親、今の父親と再婚なんです」

「…それは聞いてないよ」

そうですか、とミスティ≡千鳥は一旦口をつぐんだ。齧りかけのリンゴのような果物を手で揉んでいる。

「…その…前の父親と色々あったんで、」

ボク、そのころ大人の男の人がすごく苦手で、

今の父親にもなかなか懐かなかったんですよね」

それで、学生時代からの親友といううちの社長に相談したら、

「子どもとはゲームで遊べ！」

と、そのゲームを押し付けられたらしい。

…あの社長は相変わらずというか、芯がぶれないというか。

「ボク、昔から妖精の出てくる本とか好きで、」

母親がそれを教えてたのもあったみたい」

ミスティ≡千鳥はかすかに笑った。

「それで一緒にやってるうちに、それなりに仲良くはなれたんです」

まあ、またその後色々あったんですけどね、と、遠い目をする。

「それから、ご存知だと思いますけど、高校に行けなくなって、」

また、この世界のゲームで少し立ち直ることができて…」

なんて言ったらいいのかな、とミスティ＝千鳥は言い淀んだ。

「ボクはこの世界のゲームに何度も救ってもらったから、

この世界に恩返しできるんなら、したいんですよ…」

ゲームを作った剣さんに、って言ったほうがいいのかな」

おかしいですかね、

と言うミスティ＝千鳥は所在無げで、少し胸が痛んだ。

「なるほど…」

俺は頭を掻く。

俺にとって、グラン・ロウレルというのはただのゲームで、仕事の対象だった。

剣氏とも、これまでは、ただの同僚、上司という関係だけだった。彼女にそんな思い入れがあるということは、想像の外だった。

「話してくれてありがとう。」

…そういう事情を知らずに、頭ごなしに帰れとか言ってほんとに悪かったね」

深々と頭を下げると、ミスティ＝千鳥が慌てた。

「あ、いえ、わがままだったのはわかってるんです。

あつちの身体が寝たきりになるだろうってことは聞いてたから、また、家族に迷惑をかけてるのもわかってたんです。

吉田さんの会社とかゲームとかまでは、考えてなかったけど…」



だから…凶星を指されて頭にきちゃって」

「ごめんなさい、とミステイⅡ千鳥はくしゃっと顔を歪めた。  
あ、泣きそう。」

わー女の子に泣かれるとか勘弁してほしい。」

「えーっと、その辺は俺がなんとかしようと思う」

え？ と、ミステイⅡ千鳥が顔をあげた。

「どつちにしろ、一旦帰った方がいいかと思ってたから、  
剣さんと相談しようと思ってたんだ」

「一旦、ということは、また戻ってこられるんですか？」

ミステイⅡ千鳥が首を傾げる。

「うん、まあ、その辺も相談結果次第だけどね…」

帰れても戻ってこれないかもしれないし」

で、と言葉を継ぐ。

「色々考えてみたんだけど、

俺にもこつちで手伝えそうなおことはあると思う。」

だから…」

手伝わせてくれるかな」

にっこりとほほ笑んでみせると、ミステイⅡ千鳥の顔が再び盛大に  
歪んだ。

歯を食いしばって我慢していたようだが、目にみるみる涙が盛り上  
がってきて、

…決壊した。

「えっぐっ」

ぼろぼろ涙をこぼし、鼻水をすすりあげながら、子どものように泣いている。

えええ、なんでえ???

俺は途方に暮れつつ、なんとか慰めようとした。

「ご、ごめん、俺なんか悪いこと言った？」

「ち…が…」

溢れる涙と鼻水のせいで、言葉にならないらしい。

あーあつちの世界だったらティッシュでもハンカチでも持ってるのに！

とりあえず、持ってきていたバックパック（中）からタオルを引きずり出して渡した。

「きら…われ…てる、と…」

とぎれとぎれな言葉を聞きとるに、

始め怒ってたしひどいことも言ったし嫌われてると思ってた、と。

「あーうん、それはごめん、

でも始めは、君に怒ってたわけじゃなくてね…

その、剣氏が君をだまくらかして利用してるんじゃないか、と、剣氏に怒ってたんだよね。

途中それに割り込まれて、怒鳴っちゃったけど、ほんとごめん。

ひどいことについては、お互い様だし、  
今さつき謝ってくれたし、もういいんじゃない？」

俺がそんな風に説明すると、  
ミスティ「千鳥はぼろぼろ涙をこぼしながらも、笑った。

「剣さんは…いい人ですよ。

吉田さんに謝った方がいいって、言ってくれたのも剣さんだった  
んです」

ああ、なるほどね。

彼女が今日は昨日に比べて随分大人しいなと思っていたら、  
剣氏に叱られたってことだったのね。

そして、剣氏「大魔術師がいい人かどうかは…保留しておくことに  
した。

その後しばらくして、ミスティ「千鳥が落ちついたので、俺たちは  
野営地へ帰った。

すると、エリスが目ざとく、ミスティ「千鳥の泣いた跡を見つけて  
突っ込んできた。

「何？ミスティ、タクに泣かされたの？」

「ち、違います。これは、転んで打ったところが痛くて思わず泣い  
てしまって」

「慌てるところが怪しいわ！

あれね、タクがミスティとふたりつきりをいいことに押し倒そう  
として…」

「人聞きの悪いこと言うな！」

更にきやいきやい言い募ろうとするエリスの頭を、  
フィリップがぱかん、と殴ってようやくその場は納まった。  
フィルまじ感謝。

そんなエリスたちの手によってかまどはすでにできていて、  
運んできた枝をくべると、エリスとミスティ、千鳥がかけられた鍋  
で調理を始めた。

食材を切ったり、鍋に入れたりしながら、  
ミスティ、千鳥はエリスに何か聞いているようだった。  
材料や調理法についてだろうか。

そんな和気あいあいとした情景をしばらく眺めた後、  
俺はテントの設営をしている剣氏、大魔術師の方へ向かった。  
フィリップもその手前で作業しており、テント自体はおおむねでき  
上がりつつあった。

「何か手伝えることはありませんか？」

そのフィリップに声をかけると、うーんとフィリップが唸った。

「もう、ほぼ終わってるからなあ

ああ、そうだ、

その荷物に入っている食器を、あいつらのところへ運んでもら  
えるかい？」

…また、エリスたちのところへ戻ることになりそうだった。

「わかりました」

と答えてその荷物を手に取った後、剣氏、大魔術師のところへ向か

う。

そして、俺が声をかけようとする、あちらが先に気がついて声をかけてきた。

「…うまく行ったようですね」

うつすらとほほ笑む剣氏「大魔術師に、俺はバツが悪くなって頭をかいた。

「ええ、まあ…」

それで、ご相談があるんですが、  
食後でいいんで、ちよっとお時間をいただけますか？」

「いいですよ。」

片付けが済んだ後、寝る前に時間を作りましょう」

「ありがとうございます」

その後、ほどなく食事の準備ができ、

俺の運んだ食器に料理をつぎ分けて、和やかな夕食となった。

満天の星の中、火を囲んで摂る食事は、随分と昔に家族で行ったキャンプを思い出し、

俺は懐かしいと同時に、

これが異世界での出来事だという事実にはひどく非現実的な感覚を覚えたのだった。

Module 22 大魔術師との対話(前書き)

ひたすら剣氏と対話する回。

ぼちぼち主人公が本気出します。ええ。

スロースターターですんませ(吐血)

## Module 22 : 大魔術師との対話

食後時間を取ってくれるという約束の通り、

剣氏「大魔術師は、俺とテントの中で向かい合わせに座っていた。

それは、現代世界のテントというよりは、

テレビで見たことのある遊牧民の包とかパオいものに似ていた。

形としては丸に近い多角形で、大人4人程度がゆったりと寝れる広さはある。

女性組は別のテントに、フィリップは見張りに立ってくれている。

見張りは全員での交代制になっており、俺の順番は朝方だった。

「それで、相談と言うのは何でしょう?」

促されて、俺はおもむろに口を開いた。

「まず、伺いたいんですが、

魔王の封印の勝算ってどれくらいあるんですか?」

剣氏「大魔術師は、黙ったまま目を細めて俺を見た。

ここは、先に俺の考えを言うべきか。

「ここでの戦闘で、向こうでのゲームのデータが、

こちらの魔物のものとだいたい一致してることは確認しました」

戦った魔物の強さや能力といったものを注意深く記録してみたのだが、

ゲーム「グラン・ロウレル」でのデータとほぼ一緒と言ってよかった。

「魔王のデータも同じと考えていいんですよね？」

ベータシステムにはまだ実装こそしていないが、ゲームバランスや、クエストでのプレイヤーキャラクターの要求レベル設定などのために、

ラスボス魔王の基礎データそのものは目にしたことがあった。

細かい数値は覚えていないが、

魔王封印の最終戦は、

リミットブレイク職4種4人でLV60が最低要求レベルだった。

しかもこれは、

魔王の封印が解けてない状況で、

通常護衛についている魔族を、

他のプレイヤーたちによるレイド戦で引き離しておくという前提がある。

千鳥「ミステイ、本人がどうしても残りたいたいと思っている以上、

それを無理に引き戻すのは難しいと理解した。

恨まれても困るし、いじけて引きこもりに戻られても困る。

それこそ、本人の望みどおり、この世界を救うことができたなら、

それなりに自信もつくことだろうが…、

だが、俺の把握している情報から考えて、

それほど簡単にうまくいくとは思えなかった。

通常は1000年持つという魔王の封印が解けかけているという。

パーティメンバの3名はゲームで要求されているよりかなりレベルが高いが、

頼みの勇者はこの世界の者ではなく、付け焼刃で促成栽培中だ。

剣氏「大魔術師がロウランディア王国で王と面談はしていたようだが、



この世界でどのくらいの兵力が動かせるのか、俺には予測も付かない。

だから、まず、

剣氏「大魔術師がどのような手を打っていて、どれくらい勝算があると思っっているのかを、問いただしておきたかった。」

俺が、そんな風に説明すると、剣氏「大魔術師は、

「そこまで考えた上でのお尋ねならお話ししよう」

と、ため息をついた。

「まず、ゲーム上の魔王のデータは、これまでの経験から算出したものです。」

戦闘力自体は、ほぼ正しいと思ってきてくればかまいません。

ただし、彼はこれまでの経験から学んで成長しています、その側近の知能の高い魔物たちも成長しています。

だから、数値だけで判断できない部分があります」

封印の解け具合については…と、剣氏「大魔術師は、口ごもった。しばらく躊躇した様子だったが、俺がじっと見つめていると、あきらめたように重い口を開いた。

「ぶっちゃけ、予測より速く進展しています。」

闇の峡谷の魔物の活性具合から判断して、

かなり解けてきていると考えていいでしょう。

ですので、実はレベルアップを急ぐと同時に、

別の強化策を試してみるつもりでした」

強化策？

と気になったが、まあそれは後でお話します、と言われた。

「最後に、こちらの兵力の動員状況ですが、

お察しのとおり、ロウランディア王国の王に対応を頼んでいます。魔王の封印が解ければ、何にしろ魔物の軍勢が押し寄せてきます。その前に軍備を整えて、体制が整わないうちに叩くべきである、と。」

すでに、うちうちに各国上層部および冒険者ギルドに、通達がいつているはずです」

それにより、

レイド戦というゲーム的な仕組みではないし、数に差はあるが、この世界の冒険者による大規模な軍が編成されるだろう、ということだった。

ただし…

「ただ、それは時間がかかるため、

我々の行動に対して、魔物の軍勢をひきつける、

という役にはあまり立たないでしょうね」

それはつまり、俺らが大量の魔物を相手にしないといけないということ？

そう問うと、渋い表情をさらに渋くした。

「…相手にしたくないので、隠密で侵入するしかないですね」

え、まじで。

「幸い、私がこの世界に帰還していることは知られてないので、まだ警備は薄いようです」

まあ、その辺は、賭けるしかないんだらうけど…。

「それで、成功確率的にはどれくらいと思ってるんですか？」

俺が改めて聞くと、

剣氏「大魔術師は今までに見たことがないようなシニカルな笑みを浮かべた。

「現状把握してる情報から判断する限りは…よくて5割」

半々って、いいのか悪いのか…。

「山口さんと吉田さんは、

パーティが全滅する事態になるようなら、

優先的に元の世界にお返しますよ」

「…それって、

剣さんや、エリスさん、フィリップさんは死んでしまっただけのことですよ」

俺が思わず確かめるのへ、剣氏「大魔術師は肩をすくめた。

「我々が失敗したら、何にしろ、

この世界の大半の人間は遅かれ早かれ死にます」

青いグリフォン亭のレイチエルや、ル・シエルで言葉を交わした他の住人たちも？

俺が思い出すル・シエルの情景はのどかで活気に満ちていて、

剣氏「大魔術師が口にする凄惨な未来は想像もつかなかった。

重苦しい沈黙が落ちた。

俺は、剣氏「大魔術師の言ったことを反芻して考えてみた。はつきり言って俺には世界とか大きなものはわからない。

滅亡するとか言われてもぴんとこない。

世界を救う？何それ映画の見すぎ？

つてくらい馬鹿馬鹿しく思える。

しかし、

これまで同僚として一緒に働いてきた人間や、

困っているときに親切にしてくれた人間が死んでしまいかも知れない、  
く、

それに対して自分が何かできることがあるかもしれないとわかって  
いて、

それをしないでいるということは、

…俺にはできなかった。

(話がでかすぎて、ほんとに、現実感ないんだけどなあ)

俺は頭を掻くと、おもむろに口を開いた。

「俺があちらの世界に戻った後、

こちらに戻ってくることは可能ですか？」

「それは、どういっ…」

俺が口にした言葉が予測外だったようで、

剣氏「大魔術師は戸惑ったようだが、しばらく考えてから答えてくれた。

「色々準備や確認が必要ですが、戻ってこれないことはない、とは思います」

実際は調べてみないとわかりませんし、やってみないとわからない部分もありますけど、

と剣氏「大魔術師は、肩をすくめた。

それならば、

と、俺は、こここのところ考えていたことを話し始めた。

「つまり、状況確認と帰還経路確保のために一回戻りたい、と」

俺が説明したことを、剣氏「大魔術師が簡潔にまとめろ。

まずは、ちゃんとあちらの身体がどうなってるか確かめた上で、社長と直談判して今動いているサーバプログラムを止めないように、頼んでくるつもりだった。

ふむ、と剣氏「大魔術師が考え込む。

そこへ、俺は実はこちらが本題であることを、切り出した。

「カスタマイズをしたいんですね」

「カスタマイズ？」

剣氏「大魔術師が訝しげに俺を見る。

「俺というか山口さんもだと思っけど、

のこの身体、あちらでのゲームみたいな機能があるのはご存知ですよね」

あなたが魔法的に作り出したものなんだから、  
と、言っと、剣氏「大魔術師は困ったように笑った。

「面白いですよね。」

そこまで再現されるとは思わなかった。

吉田さんから山口さんにDMがあつたつて聞いたときは、  
そんなものまで実現されてたのかと驚きましたよ」

千鳥「ミステイからゲーム的な機能が使えることは、  
こちらにきて早いうちに聞いてはいたらしいが、  
ほぼ全機能が使えろとは、予想外だったらしい。  
今度は俺が「？」な顔をする方だった。

「剣さんは、こういう機能は使えないんですか？」

聞くと、剣氏「大魔術師は首を振った。

「僕のこの身体はこの世界のオリジナルですからね。  
そんな特殊な機能はありませんよ」

あれ、そうなんだ。

「そこまで詳細な機能がこちらの世界で実現できたのは、  
あちらの世界のコンピュータデータが使えたせいでしょうね」

剣氏「大魔術師は簡単にこちらの魔術の仕組みを教えてください。  
要は、術者の作りだしたイメージを魔力を使って実現化するのが魔  
術ということ、

通常術者の想像力と記述力、

つまり「実現化する仕組み」に対して具体的に説明するところで、

限界があるという。

「想像もしたことの無いものは作り出せませんし、曖昧な説明であれば、曖昧なものしかできあがりません」

それを補うために、参考となる物体を用意したり、魔法陣に詳細な記述を特殊な文字で書きならべるらしい。

「今回の転移魔法では、

あちらのキャラクター情報をそのまま記述に利用したので、色々な便利な機能がそのまま実現されたのでしょうかね」

なるほど、と、具体的な仕組みはわからないが、俺はなんとなく納得した。

ふっと、疑問に思っていたもうひとつを聞いてみる。

「勇者をあちらでLV90とかにしてから連れてきたら早かったんじゃないですか？」

こちらで苦労してレベル上げるより、データがそのまま反映されるんなら、

ちよちよいとデータベースの数値をいじって上げておくくらいの芸当は、

開発者としての権限も持つグランドデザイナーであれば可能なはずだった。

「…無から有は生み出せないんですよ」

剣氏「大魔術師は肩をすくめた。

簡単に説明してくれたところによると、

レベルの高い存在は、実現するためのエネルギーがやはり大きい、ということだった。

「要は、高レベルの存在を生み出すには、それなりの量の元になるエネルギー源が要るってことですね」

変換ロスもあるので、大き過ぎたら、エネルギー源自体が消滅して、魔術が失敗してしまう危険性もある、という。そういう意味で、千鳥「ミステイの当初レベルくらいが丁度よかつたらしい。

「どこからエネルギーを取ったんですか？」

剣氏「大魔術師は目を彷徨わせた。

「…企業秘密です」

言いたくないようだった。

「もしかして、俺のレベルが高かったりしたら危なかった？」

「…ええ、かなり」

剣氏「大魔術師は眉を寄せて、渋い顔をした。

…向こうから強い応援を数人連れて来てはどうか、という俺の腹案のひとつはこれで没になった。

レベル低ければ連れて来れるのかもしれないが、役に立たないだろう。

火を吹いたデスマーチなプロジェクトに新人投入して更に火を噴くようなもんだ。



と、業界関係者以外にはわからない例えを自分でして納得する。

「俺が向こうに帰ったら、

今この身体にあるエネルギーは消滅してしまうんですか？」

帰還時にはこの身体を解体する、

というようなことを言っていた覚えがあったので、

俺は聞いてみた。

「元あった場所に一時的に戻せると思います。

というか、最終的に解体後は戻るようには術式を組んであったので、

それがちゃんと働けば戻ると思います。

…ロスを出ると思いますが」

ほんとに蓄電池みたいだな。

ロスが出るのも電池に似ている…。

「どのくらいロスが出るんですか？」

「おそらく、多くて30%、少なくとも10%くらいだと思います」

ぬ、それはレベルが下がるってこと？

と、聞くと、剣氏「大魔術師はそうなりますね、と頷いた。

「正確に言うと、

下がった分のレベルになるように調整しておかないと、

エネルギー源に残ってる分から補おうとするので、

そこが枯渇すると実現化の魔術そのものが失敗するでしょう」

失敗すると、エネルギーが四散したり、運が悪ければ爆発したりす

るらしい。

それは、けっこう、怖い。

成功したとして、3割減で調整するとすると、

何回も往復するわけにもいかない、ということか。

うーん、と悩む。

「どのくらいロスが出たかとか、わかるんですかね」

聞くと、剣氏「大魔術師は首をひねった。」

「こちらでは、エネルギー源の数値増減で確認することができますが、

それを向こう側にどう伝えるかが難しいですね」

うーん。

「通信経路みたいなのは作ってないのですか？」

「通信が必要になるとは想定してませんでした」

短期で片をつけて、千鳥「ミステイを帰すことしか考えてなかった、だから、作りこんでない、という。」

まあ、仕様になければ作られないよな、

と、俺はこの魔術というものをプログラムと同じに捉え始めていた。

それ以上いいアイデアも出なさそうなので、俺は話題を戻した。

「向こうのインターフェイスをカスタマイズした場合、戻ってくるときにそれが反映されますか？」

剣氏「大魔術師が再び悩む。

「正直、ここまで再現性が高いと想像してなかったので、  
どつという結果になるかはわからないのですよ。

表面的なものであれば、反映される可能性が高いとは思いますが」

ふむ、と、考える俺。もうひとつ聞いてみた。

「ジョブチェンジとか向こうでしてきても大丈夫ですかね…」

うつつうん、と、剣氏「大魔術師が更に悩んだ。

「現状の術式自体の機能からいえば大丈夫だとは思いますが…

これ以上確実なことが知りたいなら、

後は、術式を実現化している仕組みそのものに聞くしかありません」

術式を実現化をしている仕組みそのもの？

ナニソレ？

「…コンパイラみたいなものですか？」

俺の想像したものを言葉にすると、剣氏「大魔術師が面白そうに笑った。

コンパイラというのは、人間の理解できる文字で書いたプログラムを、

コンピュータが実行できる形式へ変換してくれるプログラムのことだ。

魔法陣や呪文…剣氏「大魔術師の言い方なら「術式」か

がプログラムとするなら、

それを現実で実行する仕組みはそういうものではないのだろうか？

「どっちかというインタプリタですね」

悪戯っぽそうな光が瞳に煌めく。

インタプリタというのは、

コンパイラが一気にコンピュータが実行できる形式へ変換して、  
実行自体はその変換されたものがするのに対して、  
プログラムを逐次読取りながら実行していつてくれるプログラムだ。  
確かに動作的には違うものだけれど…どういう意味？

「どっちにしる会いに行く必要がありましたから、

その時に聞くといいでしょう」

会いに行くって…インタプリタに？

「明日はまだ準備があるので闇の峡谷で修行を続けますが、

先ほどちょっと言った強化策のために、

明後日に行く予定だったんですよ、

…地の女神に会いに」

神様に会いに行くという言葉に、俺の目は点になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0246u/>

---

異世界プログラマ

2011年8月22日18時07分発行